

八尾市生駒山地西麓扇状地面における 小溜池群の灌漑様式の類型化と地域考察

川内 誉三

(平成19年9月29日受理 最終原稿平成19年12月4日受理)

生駒山地西麓の扇状地面に分布する八尾市高安地区の小溜池群を事例として、灌漑の水利系統を類型化し、その特性を明確に位置づけることを試みるものである。

高安地区において、筆者がとらえた溜池数は595池にのぼる。そのうち553池が個人池で、共有池は42池にすぎない。全体数の8割近い463池が、満水面積0.05ha未満の小溜池群である。こういった分布状況から、小溜池群に依存した灌漑様式、小溜池群と共有池の分布が併存し、それらが相互的に機能した灌漑様式、さらに小溜池群と共有池の機能が、ふたつ接続した灌漑様式、とが接続した灌漑様式に類型化することができる。こういった灌漑様式をとらえることによって、それぞれの大字地区の土地開削の経緯が類推されるのである。高安地区での土地開削の歴史は古く、それを支えてきたのが生駒山地西麓を平行して流下する谷流水と湧水であり、それを導水・貯水して土地開削を増幅させたのが小溜池群である。こういった水利環境のもとで共有池の築造が図られ、水利の安定が模索されてきた。しかし、用水の不足は深刻で、その条件のもとそれぞれの時期に、新しい農業生産(近世期から明治中期=木綿栽培、明治中期から現在=花卉栽培、明治末期から現在=植木栽培)を定着させていった側面がみつまられる。

大阪府下では、都市化・工業化の進展により、地域のなかに調和されてきた溜池環境が大きく変貌している。調査対象地域においても同様に、溜池の潰廃化が大きく進行しているものの、大字地区によっては周辺での近郊農業の展開状況から、溜池水利が今も継続されている。こういったなかで、個人池や共有池の灌漑を含めた環境保全としての機能をみだし、小溜池群を中心とする水利保全を模索できるモデル試案づくりが望まれる。

キーワード：生駒山地西麓扇状地面、小溜池群、灌漑様式、溜池潰廃、溜池環境、地域考察

1. はじめに(前稿での研究をふまえて)

筆者は前稿において、生駒山地西麓扇状地面に位置する八尾市高安地区を事例に、小溜池群の分布状況から水利特性の概要を把握するなかで、溜池が潰廃される特質を中心に分析し、この地域での溜池環境の展望について、若干の提起をおこなってきた¹⁾。この論稿は、1977年に実施された八尾市下水道部河川課作成の『ため池諸元表²⁾』をもとに、2,500分の1の八尾市都市計画図を用い、各溜池の現況を把握するため1989年に実地調査を、1990・92年に補正調査をおこなって得た資料をもとにまとめたものである。しかし、中間報告としての範疇にとどまり、

小溜池群を取り巻く水利特性について、地域の利水背景をふまえて、核心に迫る分析にたかめることができていなかった。今回、前稿での調査によってえられた資料をさらに精査し、八尾市高安地区の地域考察をふまえることによって、農業水利の機軸となった灌漑システムを前面に、小溜池群を中心とする水利系統を類型化し、その特性を明確に位置づけることを試みるものである。

小溜池群の水利は利水の効率が悪く、伝統的な側面がより強く残映され、群小に立地する調査に多くの足労を費やせねばならないためか、その水利構造の特質を主テーマとして研究したものは少ない³⁾。唯一、地理学に立脚した小溜池群の水利研究として、奈良盆地馬見丘陵を事例に、村落池（本稿での共有池と共通）組合池（同、共有個人池と共通）個人池が分布する灌漑構造について分析した堀内の業績があげられるにすぎない⁴⁾。溜池の築造は、地域の土地開発と密接に関わってくるため、小溜池群の地域性を分析することによって、その歴史背景とともに乏水地域での土地開墾の仕組みの一端を伺うことができる。今までとらえられることが少なかった小溜池群の水利特性を把握することにより、地域性差を通して明確にできる溜池水利の研究を増幅させることにつながるものと考えらる。

2. 対象地域の概要

生駒山地は、大阪平野、京都盆地、奈良盆地に連なる沖積平野の中央部に位置する。第1図は生駒山地の全体域を等高線によってあらわしたものである。全体的には、東斜面に緩やかで西斜面に急崖をなしている。調査対象地域としてとらえた八尾市高安地区⁵⁾は、生駒山地西麓の南寄りに位置し、中河内郡北高安村と中高安村（1931年両村合併し高安村）、中河内郡南高安村（1953年南高安町）にあたり、1955年に八尾市に合併している。八尾市は中心部をはじめ、市域の多くの地域が旧大和川流域の低地部に位置するが、高安地区は唯一高燥部にあたる。

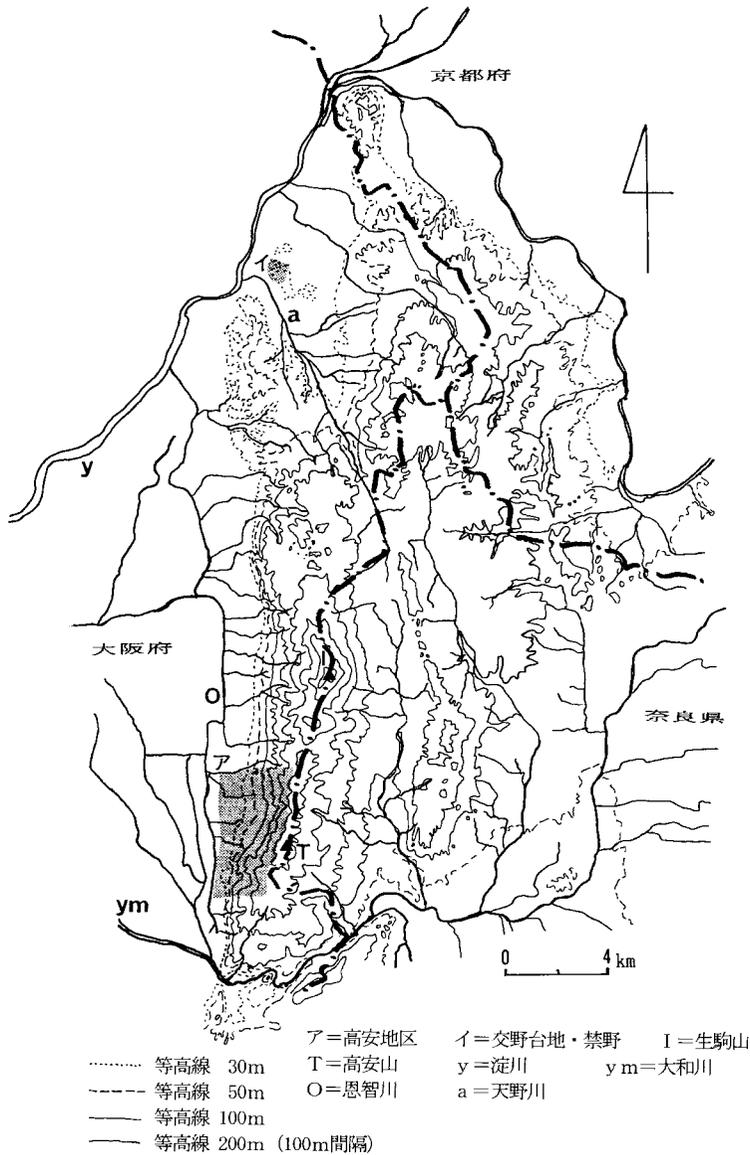
『ため池諸元表』記載の八尾市分布の溜池は486池を数える。そのすべてが生駒山地西麓扇状地面に位置する溜池群である。国土地理院発行の25,000分の1の地形図には、小溜池群が記載されていないため、同図にあらわされた高安地区の溜池は50余りにすぎない。

高安地区を対象とした灌漑水利については、水利法の見地から、この地域の谷流水の利用方法をめぐる水論につき、その一部の事例をとらえた研究⁶⁾と、奈良県側を含め生駒山地全体の溜池分布について、国土地理院25,000分の1の地形図によって概数をとらえた研究⁷⁾がみられる程度である。八尾市史では、旧大和川井路筋の樋組合の成立背景や水論について論じられているものの、高安地区の農業水利の記述は、わずか8行にとどまる⁸⁾。紀要などの郷土史関係の冊子においても、調査地の農業水利について具体的にまとめられたものに知見しえていない。

3. 高安地区の農業水利の特性

(1) 扇状地地形と谷流水・湧水の利用

生駒山地は南北に長く連なり西斜面に急峻である（第1図）。そのため西斜面の谷川は、東



第1図 生駒山地概要図

資料：国土地理院 1：25,000各図を縮小して作成。

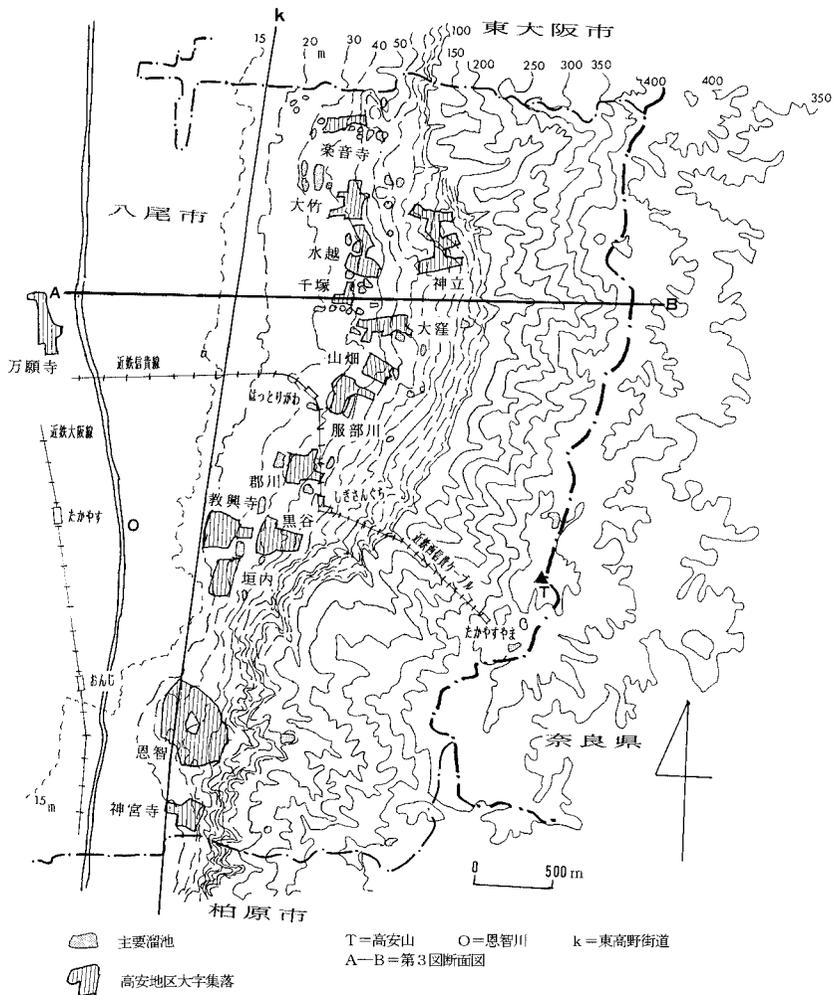
Fig.1 Area of Ikoma mountain region

より西に平行して幾筋もの流れとなる（第4図）。それぞれの谷流水が運搬した土砂は西麓に堆積され、その付近に多くの小規模な扇状地地形が形成される。こういった土地条件のもとでは、各谷筋の流水、もしくは湧水を導水することによって土地の開墾が図られた。しかし、谷流水や湧水にたよるだけでは、浸透性の強い扇状地面一帯の用水をまかなうことはできず、そ

れを貯水することによって、土地利用の効率化が増幅されてきた。したがって、扇状地面に多くの小溜池群が築造され、これによって農業用水の不足を補い、順次、可耕地が拡大されていったのである。

生駒山地西麓にあたる四條畷市、大東市、東大阪市、八尾市、柏原市にかけて、広範囲に小溜池群が扇状地面に分布する。特に高安地区が含まれる主峰の生駒山（第1図I：標高642.3m）から高安山（第1図T：標高487.5m）に連なる脊梁が高峻であり、土砂の堆積量が最も多くなることから幾多の複合扇状地が形成され（第2・4図）、その部面での小溜池群の分布が顕著である（第1表）。

高安地区の各大字地区⁹⁾は、生駒山地西斜面の谷流水を用水源としているため、その区域は



第2図 八尾市生駒山地西麓概要図

資料：国土地理院 1：25,000信貴山図をもとに作成。

Fig.2 Study area of the west base of the Ikoma mountain region in the City of Yao

八尾市生駒山地西麓扇状地における小溜池群の灌漑様式の類型化と地域考察

第1表 八尾市高安地区の溜池分布・潰廃溜池数 Table 1 Distribution and ruin-numbers of irrigation reservoirs in Takayas district, Yao City

大字地区	栗吉寺		神立		大竹		水越		千塚		大塚		山畑		服部川		郡川		黒谷		教興寺		垣内		恩智		神宮寺		計		
	潰 廃 溜 池 数	分 布 数																													
A 山間・谷部	0.05ha未満	1																					5	1	7			13	2		
	0.1 ha未満																						1	1	1			3	2		
	0.1 ha以上																														
	計	1																					1	1	8			16	4		
	0.05ha未満																														
B 扇頂部	0.1 ha未満																														
	0.1 ha以上																														
	計																														
	0.05ha未満	8	1	34	3																										
	0.1 ha未満	1																													
C 扇尖部	0.1 ha以上	2	1																												
	計	9	1	36	5																										
	0.05ha未満																														
	0.1 ha未満																														
	0.1 ha以上																														
D 扇端部	計	9	1	36	5																										
	0.05ha未満																														
	0.1 ha未満																														
	0.1 ha以上																														
	計	9	1	36	5																										
総計	0.05ha未満	34	6	74	8	26	9	16	5	5	2	46	10	20	4	19	5	11	4												
	0.1 ha未満	6	2	15	4			5	1	7	1				4	3															
	0.1 ha以上	1	1					2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	計	41	9	89	8	30	9	23	7	11	4	54	12	20	4	24	5	15	7												
	0.05ha未満	1																													
総計	0.1 ha未満	3	1					1	1	1	2	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	0.1 ha以上	4	1					3	1	3	2	1	2	2	1	2	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
	計	45	10	89	8	34	10	26	8	12	5	56	12	22	5	26	6	17	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	0.05ha未満	32	20					44	24	9	8	7	5																		
	0.1 ha未満	6	4					3		2	2																				
総計	0.1 ha以上	1	1					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	計	39	25					48	24	11	10	8	6	2	6	3	1	1	2	2	3	3	1	1	1	1	1	1	1		
	0.05ha未満																														
	0.1 ha未満																														
	0.1 ha以上																														
総計	計	39	25					50	24	11	10	8	6	3	1	7	4	2	2	3	3	5	4	1							
	0.05ha未満																														
	0.1 ha未満																														
	0.1 ha以上																														
	計	94	37	126	13	84	34	37	18	20	11	59	12	25	6	35	10	19	9	13	9	6	5	23	14	43	28	11	7	595	213

注) 1. 八尾市河川課『ため池諸元表』をもとに、実地調査により作成。
 2. 共有個人池は、機能の削面を鑑み、服部川の畔の惣池を除いて個人池に含めて算出。
 3. 所有権利者の所在地外に溜池が位置している場合、元の大字地区に含めて算出。
 4. 基準面積は満水面積で、堤堰部を含まない。
 5. 潰廃溜池は1990年現在、一部潰廃池の場合も一池として算出。
 6. 潰廃溜池には、水越惣池の池上に設置された土地利用を含む。

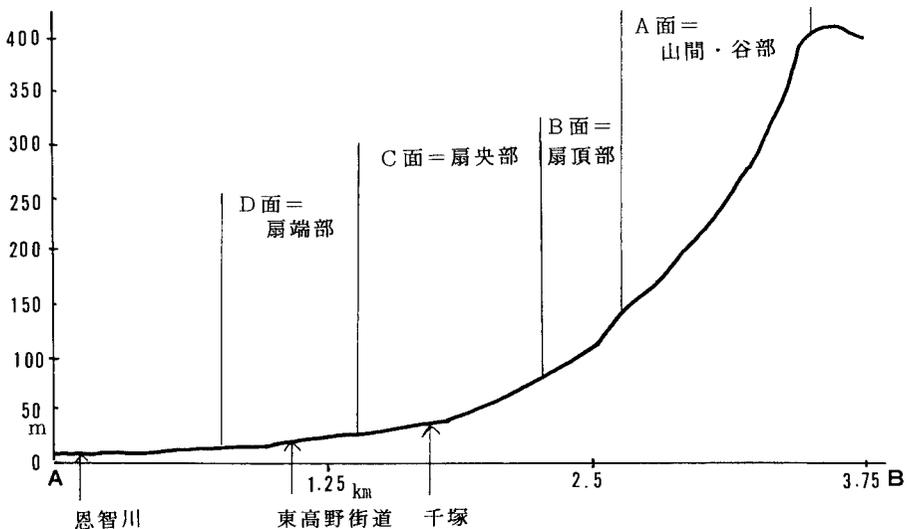
総じて脊梁部から扇端部にかけて狭長であるのが特徴である（第6図～第9図）。これは入会権とともに、谷流水の導水を目的とした水利上の要因が大きく作用する。谷流水の導水をめぐって水利秩序が形成され、旱魃期には番水制が敷かれ、なかでも谷川が大字地区界を流下する場合、その競合関係が強くあらわれる。

(2) 溜池分布の特性

実地・聞き取り調査をした結果、すでに潰廃された溜池や『ため池諸元表』未記載の溜池を含め、高安地区においてとらえた、その数は595池にのぼる。この595池を対象に、第2図をもとに作成した断面図（第3図）によって、高安地区の溜池分布の特性について考察を加えておきたい。断面図は扇状地形の基本型であるA面＝山間・谷部、B面＝扇頂部、C面＝扇中部、D面＝扇端部の四区分とした。D面より西は、生駒山地西麓の谷流水が流下する恩智川（第1・2図○、第4図○）以西の低地部に連なる。

断面区分にしたがって、集落ごとに高安地区の溜池分布数を第1表にまとめた。それによると、553池が個人所有であり、共有池は42池にすぎない（個人共有池名義の服部川：峰の惣池、第7図25を含む）。全体教の8割に近い463池が、満水面積0.05ha未満の小溜池群である。

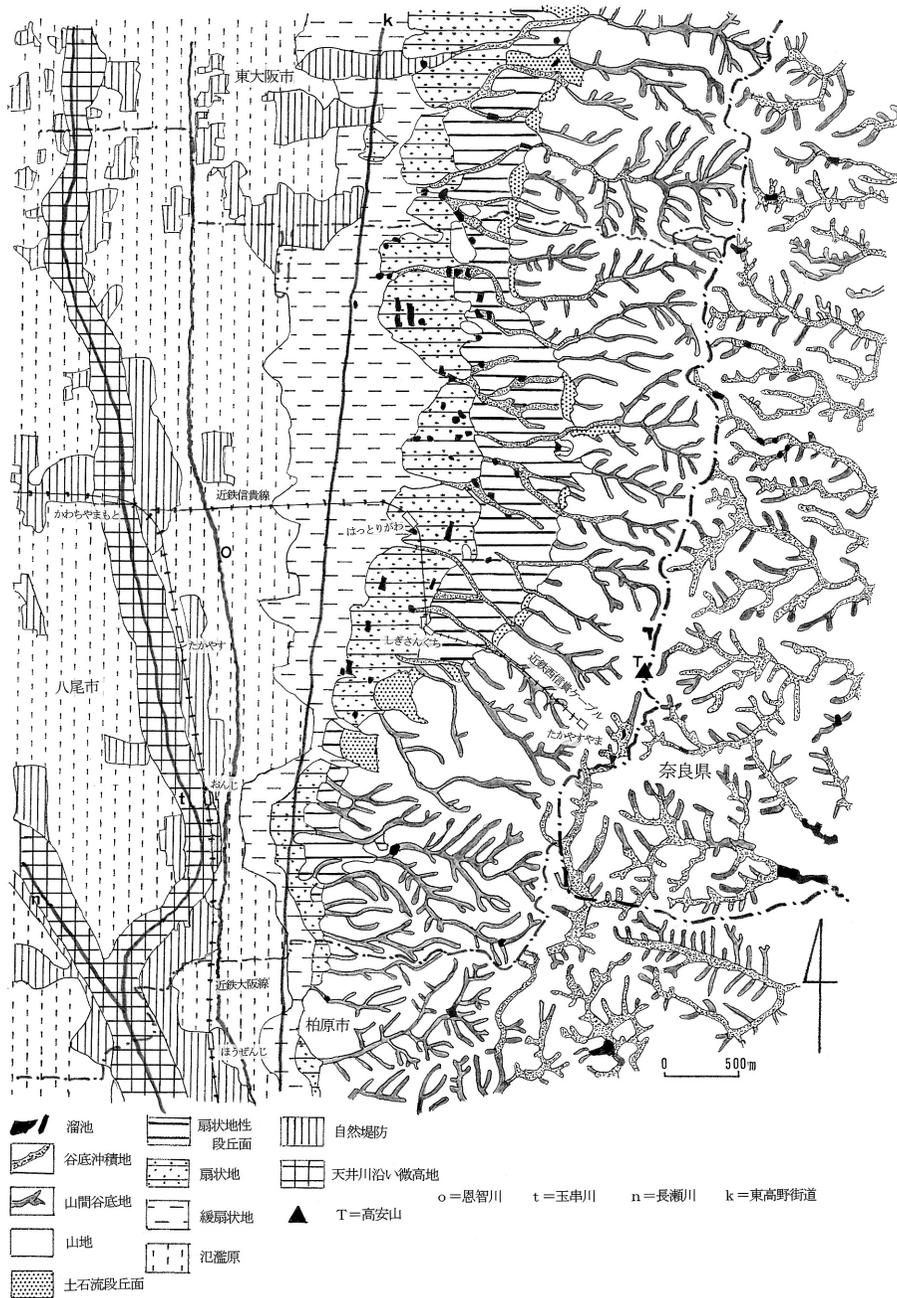
第2・4図によって分かるように、神立、大窪あたりの扇状地地形の形成が最も大きく、南下するにしたがって生駒山地と恩智川が近接するため、その規模は小さくなっている。溜池の分布は、扇状地の形成規模に比例して、南に位置する大字地区ほど少ない。C面＝扇中部とD面＝扇端部に8割以上の495池が集中することから、この部面での本格的な土地の開墾は小溜池群の築造によって可能になったものと考えられる。0.1ha以上の溜池は38池で、そのう



第3図 八尾市生駒山地西麓断面図

資料：第2図、A B断面図をもとに作成。

Fig.3 Cross section of the west base of the Ikoma mountain region in the City of Yao



第 4 図 八尾市生駒山地西麓周辺土地条件図

資料：国土地理院 1：25,000大阪東南部土地条件図、八尾市役所 1：10,000八尾市全図をもとに作成。

Fig.4 Land condition map of the west base of the Ikoma mountain region in the City of Yao

ち共有池は25池を数える。共有池25池のうち21池までが、C面＝扇央部、D面＝扇端部に分布し、高安地区にあって最も規模の大きい溜池がみられる。A面＝山間・谷部に分布する溜池は少ない。しかし、このA面に位置する23池のうち6池が共有池で、他の部面よりその比率が高くあらわれる、などの事象をとらえることができる。

(3) 個人池と小溜池群

高安地区の溜池所有形態は、各大字地区共有池、受益戸数2戸以上で所有する共有個人池、受益戸数1戸で所有する単独個人池に区分できる。共有個人池には、大竹の観音池（第6図ア：受益戸数27戸）服部川の峰の惣池（第7図25：受益戸数37戸）のように、比較的規模の大きい溜池を確認することができるが、そのほとんどは受益戸数2戸、多くとも5、6戸程度までであり、単独個人池（以下、個人池）と同じように、水田と溜池の権利が一体化した状況をとらえることができる（以下、機能の側面を鑑み、共有個人池は峰の惣池を除き、統計上では個人池に含めて算出）。0.05ha未満の小溜池463池のうち、459池が個人池である。こういった個人池の名称には、所有者の名字や屋号、先祖の名前によって習わされたものが多くみられる¹⁰⁾。

個人池の権利関係について、山極は生駒山地の北端の交野台地にあたる北河内郡牧野村禁野（現・枚方市）の周辺地域（第1図イ）を事例に、溜池築造の際、周辺に残土を盛り上げた小山（松樹）と、水田地は一体のものであるととらえている¹¹⁾。禁野周辺は住宅開発などによって、当時の地形の形骸すら認められず、同じように都市化による地形改変が著しい泉北丘陵や羽曳野丘陵に点在した個人池の小溜池群の権利関係とも同様で、高安地区とも基本的には共通するものである¹²⁾。

個人池の管理は、すべて個々の農家に委ねられることから、所有農家の思惑・裁量によって、小溜池の存廃が左右される。それに都市農業の進展による土地利用や、営農構造の変化によって、かなり早い時期に潰廃された個人池が確認されていることから、高安地区において最も多い時期には700池以上の個人池があったものと推定される¹³⁾。

こういった小溜池群による灌漑方法は、個々の複雑な権利関係や利害が強く、用水源として不安定な側面をもち、土地の利用の効率からとらえて不合理な要素が強く残される。それだけに極度に土地利用の集約化がすすんだ都市近郊に位置する農業地域にあっては、安定した水源確保のため、早い時期より新規用水の導水が模索される傾向にあった¹⁴⁾。だが、高安地区は、

ふれてきたように小谷で急流のため、上流部に大規模な谷池を築造することは困難であり、地形上の制約が強かったこと、用水不足から、いち早く花卉栽培などの水田以外の転作化が促進されていたこと、導水距離が長くなる旧大和川からのポンプ揚水事業や、流水が少ない大和川上流部から幹線水路設置による用水改良事業については、既存水利との調整が難しく、それに採算面で支障をきたすことが予測されたこと、高安地区では、弥生遺跡の分布がみられるように、谷流水・湧水を利用して古くより開削された歴史をもち、用水は不足すれども、それを克服してきた完熟された水利システムがとられていたため、大規模な用水改良事業の導入について、地元から強い要望がなかったこと、などがあげられ、ほとんど変化することなく、

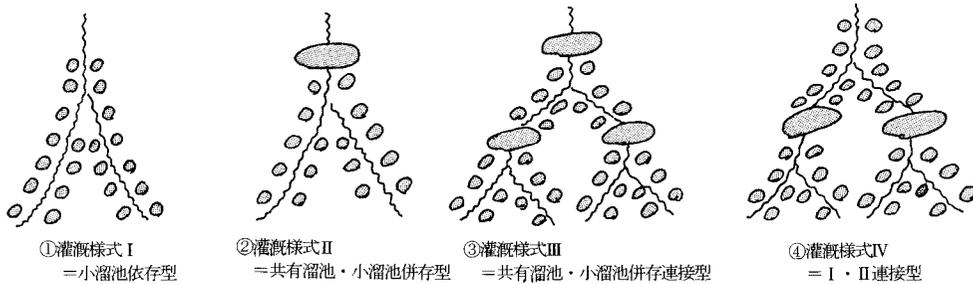
伝統的な小溜池群を中心とする灌漑方法が、今に存続されているのである。

4. 高安地区の灌漑様式と地域考察

(1) 灌漑様式の類型化

断面区分（第3図）にしたがって、溜池の分布状況を見ることにより、高安地区の灌漑様式を次の四形態に類型化することが可能となる。それは小溜池群の分布が主体であり、特に扇中央部に集中してみられることから小溜池群に依存した灌漑様式がとらえられる。神立の場合、扇中央部に展開する農地は、谷流水・湧水とそれを導水した小溜池群によって用水がまかなわれている。こういった個人所有の小溜池群に強く依存する形態がみられ、これを灌漑様式として類型化する（第5図）。さらに、小溜池群と共有池の分布が併存している状況から、それらが相互的に機能した灌漑様式がとらえられる。例えば恩智の場合、上流山間・谷部に共有池を、下流部の扇状地に小溜池群を配した関係がみられる。大竹の場合は、扇中央部から扇端部にかけて、この関係がふたつ接続した形態になってあらわれる。恩智のような場合を灌漑様式（第5図）、大竹のような場合を灌漑様式（第5図）として類型化することができる。さらに楽音寺では、扇端部で小溜池群を中心とする灌漑様式と、扇中央部では共有池と個人池が併存する灌漑様式が接続する形態をとるため、これを灌漑様式として示しておきたい（第5図）。

本稿では、上記の典型的な灌漑様式をもつ大字地区を中心とした地域考察を通して、高安地区の小溜池群の水利特性の全体像を明確にしておきたい。



第5図 八尾市高安地区の灌漑様式類型図

資料：実地調査もとに、小溜池群の水利特性の分析をもとに作成。

Fig.5 Irrigation systems in Takayasu district, Yao City

(2) 灌漑様式（小溜池依存型）

こうだち
神立

神立の区域は、第6図に示したように十三谷と音越谷に挟まれた山間部と、その谷流によって形成された扇状地の扇頂部から扇中央部にかけて展開し、山麓部には湧水帯がみられる。神立では十三谷と音越谷の間に木山谷、宮谷、釈迦堂谷などの小谷が分布し、それぞれの谷筋にそって小溜池群がみられる。調査において確認した神立所在の溜池は126池にのぼる。十三谷

の山間部に、共有池の神立惣池¹⁵⁾(第6図・第3表5)が築造されているものの、貯水量が少なく広範囲にわたって灌漑する機能をもたず、旱魃時において十三谷筋に送水する程度である。したがって、神立の灌漑は谷流水・湧水と、それを導水した個人池によってまかなわれ、高安地区における小溜池群による灌漑様式Ⅰの典型的な事例地域といえる。

近世期において木綿が幕府の奨励農産物であり、本田畑において収穫することを黙認していたため、生駒山地西麓部の地域では盛んに栽培されていた。1689年の貝原益軒の『南遊紀行』に、山の根木綿として広く栽培していたことが知られ、その中心が高安地区である¹⁶⁾。なかでも神立周辺地域では、木綿栽培の商品作物としての収益の高さと相俟って、扇状地地形によって規制される土地条件から、用水不足を緩和する方策として山の根木綿の栽培が盛んな地域であった((3) 恩智参照)。また、神立では木綿栽培と併せ、早くより切花がつくられている。特に明治中期に至り、木綿栽培の衰退とともに、それに代わって花卉栽培が台頭することとなった¹⁷⁾。明治末期には、すでに加温による促成栽培方法がとられ、山間で花木(枝もの)・田畑で草花(草もの)という構図が定着していった。神立において花卉栽培が発達したのは、優れた技術、先取的な経営、恵まれた消費市場という背景があったからといわれる¹⁸⁾。しかし、高安地区のなかで最も扇状地地形に規制された狭小な耕地面積、用水不足といった土地の制約に対し、長い歴史のなかで培われた農家での、不利な条件を克服してきた側面を注視しておかねばならない。花卉栽培に必要な用水量は水田に比し、5分の1～10分の1程度で済むといわれる¹⁹⁾。耕地の制約に対し、鳥取県西部や南紀に第二農場の経営をはじめた農家の出現など、楽音寺、大竹、水越、大窪など周辺大字地区への出作がみられる。その出作の多くが花卉栽培を目的としたもので、神立の花卉栽培の技術が府外に伝播するきっかけともなっていた。

神立では、こういった著しい用水不足のため、谷流の導水をめぐって番水の取り決めがある。大窪との境界を流れる音越谷筋は、番水に入ると大窪と隔日に取水する²⁰⁾。十三谷、木山谷、宮谷、釈迦堂谷は、すべて神立の権利下であり、各谷筋の上流にある石積みのでこのところで番水に入る。1980年頃に番水制を敷こうとしたことはあるが、降雨がみられたため実施されなかった。しかし、今も旱魃時には、耕作者ごとに時間割された番水制が敷かれる取り決めが合意されている²¹⁾。番水の取水は、水田に直接導水するのか、個人池に貯留するのか、耕作者の判断に委ねられる。

神立集落の北東側、楽音寺と大竹の境界に十三峠越の自動車道が整備されたが、高安地区のなかであって、都市化の進展は遅く、それを原因とする溜池の潰廃はみられない。しかし、兼業化や若年層の農業離れという社会的な現象から、個人池の管理・維持が難しく、畑地に転用、もしくは放置状の溜池が目立つ(第2表)。自動車道の建設から、湧水の水脈が断たれ、かつて程の水量が期待できず、耕地割にしても、地形型に規制されるため棚田状になり、圃場整備の立ち遅れを指摘する声が強²²⁾。しかし、神立の小溜池群をはじめ、棚田状の耕地割・集落立地の景観は優れ、高安地区にあつて専業農家の比率が高く²³⁾、花卉栽培を中心とした農業高生産は維持されている。神立は谷流・湧水水利にはじまり、その利水方法の改善を図りながら、土地条件を克服し伝統を育んできただけに、高安地区にあつて最も土地開墾の様子が今に伝え

第2表 八尾市高安地区の廃池跡の土地利用分類（延件数）

Table 2 Classification-numbers of land use on the abandoned reservoirs in Takayas district, Yao City

区分	大字地区	楽音寺	神立	大竹	水越	千塚	大窪	山畑	服部川	郡川	黒谷	教興寺	垣内	恩智	神宮寺	計
公共用地	学校	7				2								1		10
	公民館	1			1	1		1	1	1		1			1	8
	福祉施設								1					2		3
	公園				1			1	1							3
	他			1		1										2
住宅・工場用地	住宅	7	1	2	2					5	1	1	9	9		37
	工場	4												1		5
	他	1		1			1									3
空地	駐車場	7		3	2	1		2	2	1						18
	埋立地	4	1	2		1	2	1		3	1		2	3		20
放置状		6	6	23	10	5	6	3	4		6	3	3	4	5	84
畑地		6	6	3	3	2	4	1	2	1	1			5		34
計		43	14	35	19	13	13	9	11	11	9	5	14	25	6	227

注) 1. 1989・90年:実地調査により作成。

2. 大竹=水道局、千塚=郷土資料館、市役所出張所。

楽音寺=宗教施設、大竹=住宅庭園、大窪=宗教施設。

3. 水越惣池の池上に設置された土地利用を含む。

4. 1池につき、複数の土地利用がなされた場合、延件数としてとらえたため廃池数より多くなる。

られている。

(3) 灌漑様式（共有溜池・小溜池併存型）

服部川

服部川の主要谷流水は、立石越谷と松川谷（松尾谷）である（第7図）。立石越谷は山畑との競合関係が強く、番水に入ると山畑1日、服部川3日の順序で30日間継続し、最初の1日と最後の1日は山畑が取水する取り決めがなされている²⁴⁾。松川谷は番水に入ると郡川1日、服部川2日の順序で取水する²⁵⁾。共有池は、服部川惣池（第7図・第3表22）、馬洗池（第7図・第3表23）、服部川大池（第7図・第3表24）をみることができ、いずれも扇中部から扇端部にかかるあたりに位置する。生駒山地脊梁部に峰の惣池（第7図・第3表25）が立地しており、生駒山地の山間部での小谷は急流であるため、その位置での堰止池の築造は難しく、山頂部に適地をもとめた典型例といえる。峰の惣池は受益戸数37戸の共有個人池であり、立石越谷を流下させ、番水時には4日のうち服部川に権利のある3日の間に流すことがきめられている²⁶⁾。この4池を中心として、扇中部北寄りに個人池が20池余りみられ小溜池群を形成する。さらに服部川惣池の西寄りの扇端部に比較的面積の大きい共有個人池を確認することができる。扇頂部から扇中部にかけて未開墾地が展開し、郡川寄りの南は近鉄信貴線服部川駅に近いこともあって、早い時期に住宅地として開発されている。こういった土地利用の状況から、主な水懸かりは扇中部から扇端部に広がる。溜池の分布状況からとらえた場合、共有池と個人池

第3表 高安地区の共有池

Table 3 Situations of community reservoirs in Takayas district, Yao City

溜池番号	共有池名	満水面積ha	備 考	溜池番号	共有池名	満水面積ha	備 考
楽音寺				服部川			
1	楽音寺惣池	0.3		22	服部川惣池	0.8	72年、公民館・公園(2,412m ²)
2	島池	0.1		23	馬洗池	0.2	
3	楽音寺新池	0.3	73年、大学(4,038m ²)	24	服部川大池	0.4	72年、老人福祉施設(6,916m ²)
4	キク池	0.03		25	峰の惣池	0.2	所有名義は共有個人池
神立				郡川			
5	神立惣池	0.08		26	郡川惣池	0.6	76年、公民館・住宅(3,349m ²)
大竹				27	誕生惣池	0.2	釣池
6	大竹新池	0.4	心合寺山古墳周濠池	28	山の惣池	0.05	
7	大竹惣池	0.7	心合寺山古墳周濠池	黒谷			
8	花岡池	0.3	77年、水道局(6,855m ²)	29	重頭池	0.3	74年、道路敷(95m ²)
9	御池	0.2		30	半銅池	0.1	
10	定池	0.2		31	上蓮池	0.2	
11	菱池	0.2		32	下蓮池	0.2	
水越				教興寺			
12	長池	0.1		33	寺池	0.3	
13	水越惣池	0.4	池上に公民館	34	更池	0.1	77年、公民館(1,831m ²)
14	トンボ池	0.08		垣内			
千塚				35	最上池	0.03	
15	千塚大池	0.2	83年、公民館・空地等(1,937m ²)	36	清水池	0.01	
大窪				37	垣内新池	0.06	82年、住宅
16	大窪惣池	0.3		38	小長防池	0.09	
17	大窪大池	0.1		恩智			
18	蓑淵池	0.2		39	油谷池	0.07	池敷売却、水利権のみ
山畑				40	恩智惣池	0.7	
19	城ヶ池	0.1	72年、公民館・公園(1,857m ²)	41	立原池	0.2	
20	山畑惣池	0.1		神宮寺			
21	(池名不詳)	0.06	72年、空地(1,028m ²)	42	里の内池	0.03	公民館、残池防火用水

注) 1. 八尾市河川課『ため池諸元表』をもとに、実地調査により作成。

2. 溜池潰廃年は、八尾市管財課資料による。

3. 溜池番号は第5～第8図を参照。

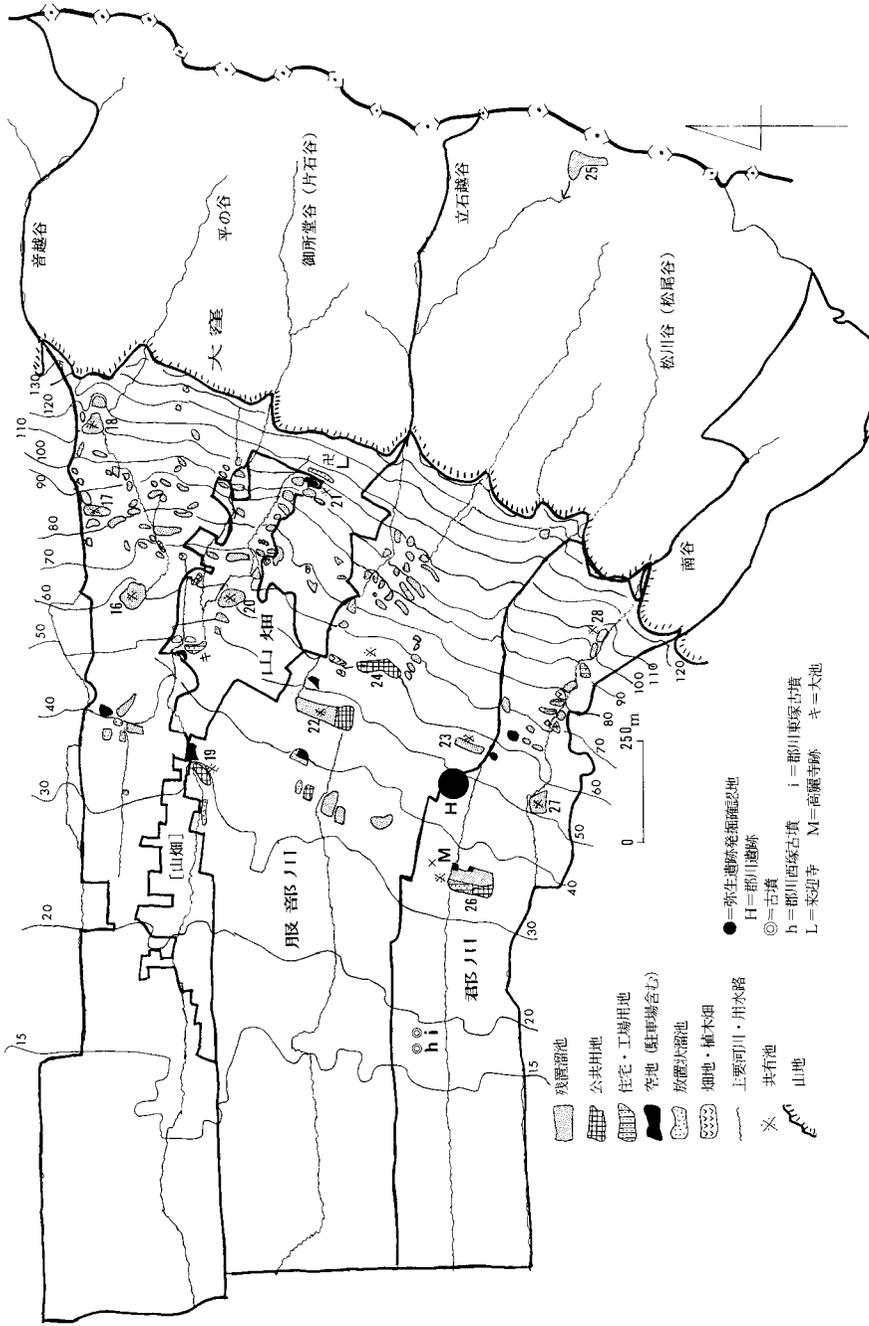
4. ()内の潰廃面積は八尾市管財課資料により、堤塘敷を含めた登記簿面積による。

5. 潰廃現況は1990年現在。

6. 溜池番号の、印は全池潰廃溜池を示す。

がふたつ併存した灌漑様式の形としてみることができ、峰の惣池や扇尖部に位置する小溜池群の多くは水懸かりと近接したものではないため、機能的な面を重視し灌漑様式に近い形態として位置づけておきたい。

馬洗池は松川谷の谷流を導水し、その下流に郡川との境界、郡川集落の北部にかけて郡川遺跡(第7図H)が確認され、弥生土器、土師器、須恵器が散布し、周辺に新たな遺構・遺物のあることが推察されている²⁷⁾。傾斜が緩やかになる扇尖部から扇端部にかかるあたりに位置するため、松川谷の導水が容易であったことから、この周辺一帯での開削が早かったものとみら



第7図 溜池分布と池敷の土地利用図 (大窪、山畑、服部川、郡川)
 Fig.7 Land use on the abandoned reservoirs and distribution of irrigation reservoirs (Okubo, Yamatake, Hattorigawa, Korigawa community village)
 資料・注) 第6図に同じ。

れる。

服部川を中心として植木畑の立地が目立つ。阪本は高安地区の造園業の形成について、本格的な発達には1900年頃からで、高度成長期の住宅需要の増加によって急成長したことをとらえている²⁸⁾。阪本の作成した1956年当時の土地利用図によると、植木畑は服部川の扇央部を中心として、未開墾地に混在するように分布している。この期での植木畑の水田地への進出はまだ少なく、1970年代に入って、輸送上至便な扇端部の水田地が植木畑に急激的に転用されている。植木畑は当初、水利に恵まれない扇央部の未開墾地に立地していったが、商業的な価値がたかまるとともに造園業者が急成長し、その期に扇端部の水田地へ収斂されていった経過をとらえることができる。服部川を中心とする高安地区の造園業の発達は、神立の花卉栽培に関連し、花木剪定から植木職技術が萌芽していたこと、同業者組合の成立により流通組織の整備がなされたこと、住宅開発を中心とする急激な都市化の進展に支えられ消費市場に恵まれたこと、道路網拡充による輸送手段が活用できる至便な土地であったこと、などの要因があげられている。こういった要因とともに、容易に植木畑への転用を促進させた水利にめぐまれない土地事情や、脱農・兼業化が早く進み、造園業者の進出を促進させた営農構造が背景にあることをみつめておかねばならない²⁹⁾。

服部川惣池は、高安地区のなかにあって最も規模が大きく、貯水機能に優れ、服部川の扇端部を広範囲にわたって灌漑する。しかし、植木畑への転用や住宅地化から、用水の余剰化が生じ、1972年に共有池の服部川大池が潰廃され、跡地に老人福祉施設が建設されている。服部川惣池も公民館・公園用地として一部が埋め立てられた。個人池の潰廃は8池に及び、跡地は公園、植木畑、駐車場などに利用され、放置状になった溜池がみられる（第2表・第3表）。

こおりがわ 郡川

郡川の谷流は、服部川との境界を流れる松川谷と南谷である（第7図）。松川谷は服部川との競合関係が強く（(3) 服部川参照）南谷は郡川の権利下にある。溜池は、このふたつの谷筋に沿って分布する。扇央部にみられる小溜池群は、南谷の谷流を導水したものであり、その小溜池群の最上流にある山の惣池（第7図・第3表28）と、扇央部から扇端部にかかるあたりに位置する誕生惣池（第7図・第4表27）のふたつの共有池によって補水され、扇端部を灌漑する。松川谷筋は、主に共有池の郡川惣池（第7図・第3表26）によって扇端部が灌漑される。したがって南谷筋は小溜池群と共有池、松川谷筋は共有池を主体にした灌漑様式がとらえられる。松川谷筋にも幾つかの個人池がみられることから、灌漑様式に類似した形態といえる。

扇央部は未開墾地を主に畑地・植木畑が混在し用水に恵まれない。郡川の集落北側に郡川遺跡（第7図H）が分布し、さらにその西寄り、郡川惣池の北あたりに奈良時代に大伽藍を誇った高麗寺跡（第7図M）が確認されている³⁰⁾。こういったことから、この部面より西寄りの扇端部の水田地の開発が早く、溜池の築造によって拡大されていったものと考えられる。扇端部の西寄りの水田地は、植木畑に転用されているところが多く、土地利用をはじめ、溜池の分布、灌漑様式とも服部川と共通する水利構造をもつ。近世初期は、服部川に含まれ同一村であっ

た³¹⁾。

共有池の郡川惣池の西側が埋め立てられ、公民館、住宅に転用されている。近鉄信貴線信貴山口駅周辺が住居地域に指定されていることから、南谷の扇央部の小溜池が住宅地として潰廃されている例がみられる(第2表・第3表)。

きょうこうじ 教興寺

高安山より南下するにしたがい低くなり、谷流が浅くなることから、裾部での土砂の堆積は少なく、扇状地の形成は小規模である。教興寺・黒谷より南は、西の低地部を北流する恩智川とも近接することから、全般的に溜池の分布は少なくなる。教興寺は山麓が迫り、扇央部は黒谷地内となっているため、農地は西寄りの扇端部に集中される。近鉄大阪線高安駅と至近距離で結ばれることから、宗教施設、建売住宅などへの転用が著しい。

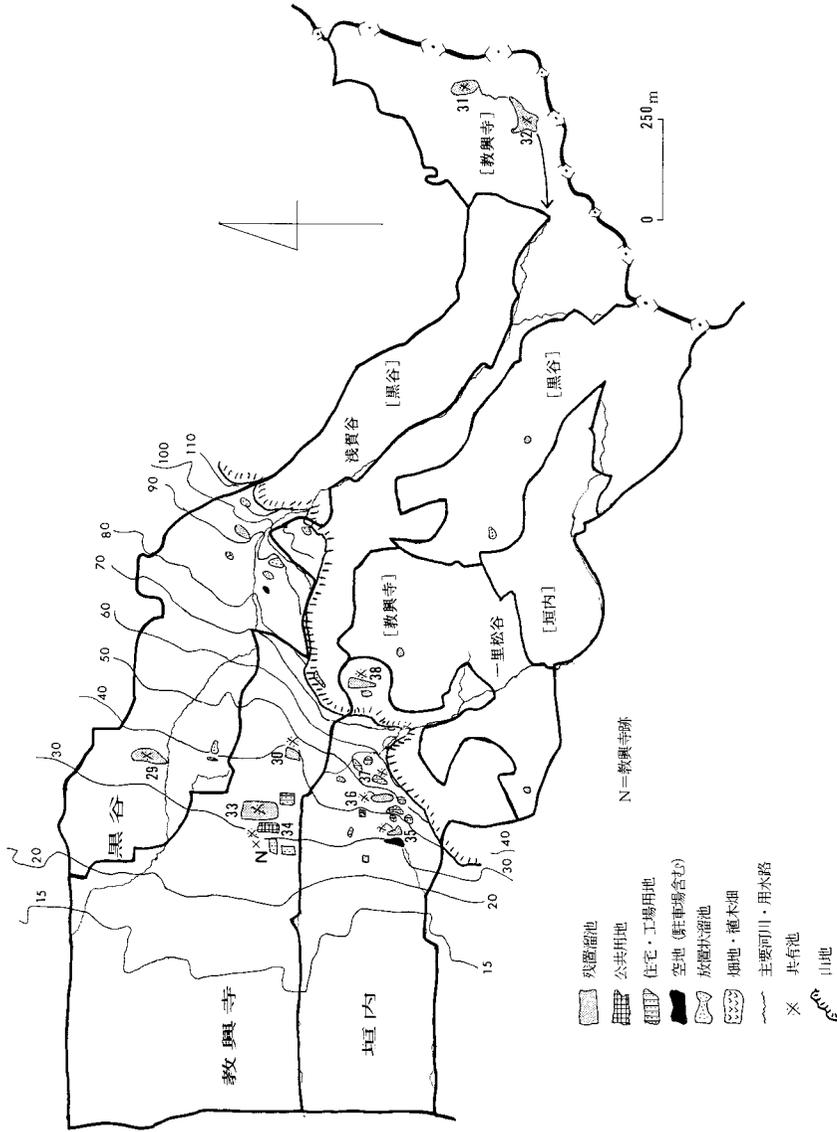
地籍図によると教興寺、黒谷、垣内の山間部の区域は、入会権との関連から飛地が多く互いに交錯している。第8図では教興寺の区域が黒谷寄りの扇端部を取り込んだ形になっているが、教興寺寄り(南西寄り)の扇端部を含め、互いの領分は複雑に錯綜している。こういったことは谷流水の権利にもあらわれ、一里松谷は番水に入ると、教興寺=2.5、黒谷=2.5、垣内=5の配分になっている³²⁾。特に教興寺と黒谷は競合関係をもちながらも、近世初期は黒谷に含まれ同一村の扱いであり³³⁾、集落が互いに隣接し、領主支配の構成も同一経過をたどったことから³⁴⁾、用水の利用をめぐる併存する関係がみられる。こういったことが互いに錯綜した領分になってあらわれたものと考えられる。

一里松谷の谷流水は、共有池の寺池(第8図・第3表33)、更池(第8図・第3表34)に導水され、西寄りの扇端部に灌漑する。個人池を確認することができるが、一池は住宅に転用され、あとの二池は放置状になり、すでにその機能を果たしていない。更池は1977年に公民館用地として潰廃されている。変則的ではあるものの、共有池と個人池が混在していることから、灌漑様式の形態としてとらえることができる。

寺池と更池の西寄り一帯に教興寺跡(第8図N)のあったことが伝えられ、秦川勝が聖徳太子の発願をうけて建立したといわれる。荒廃した教興寺を1269年に西大寺の叡尊が再興し、13~14世紀に全盛を誇り、1562年の教興寺合戦で再度荒廃、1677年に復興したものが、現在の教興寺につながる。現境内地の部分的な発掘で、1562年の戦火とみられる焼土、平安~室町時代の遺瓦、7世紀の須恵器、古墳時代の土師器が出土し、付近で古墳時代の集落跡の存在が予想されている³⁵⁾。『河内鑑名所記』には、寺田34町歩を有し、七堂伽藍を誇ったとある³⁶⁾。この付近には寺池、大門田、瓦田、本浄坊、寺角などの小字名がみられ、広範囲にわたっていることから広大な寺域であったことが伺われる。こういったことから、寺池の西寄り扇端部にかけて、かなり早い時期より開発されていたものと考えられる。

かいち 垣内

垣内は、教興寺と黒谷との競合が強くなる((3) 教興寺参照)一里松谷の谷流水と、それ



第 8 図 溜池分布と池敷の土地利用図 (黒谷、教興寺、垣内)

Fig.8 Land use on the abandoned reservoirs and distribution of irrigation reservoirs (Kurotani, Kyokoji, Kaichi community village)

資料・注) 第 6 図に同じ。

を導水した小溜池によって西寄りの扇中部から扇端部への灌漑と、一里松谷用水が得られない黒谷との境界に接する扇頂部斜面への、共有池の小長防池（第8図・第3表38）による灌漑がとらえられる。共有池は小長防池の他、最上池（第8図・第3表35）、清水池（第8図・第3表36）、垣内新池（第8図・第3表37）を確認することができる。垣内では、これらの共有池と、集落内に防火用水としての機能をもつ貯水池を含め、全て合わせて惣池（そいけ）と呼称される³⁷⁾。共有池と個人池が混在した灌漑が主となるため、灌漑様式の形態とみなすことができる。

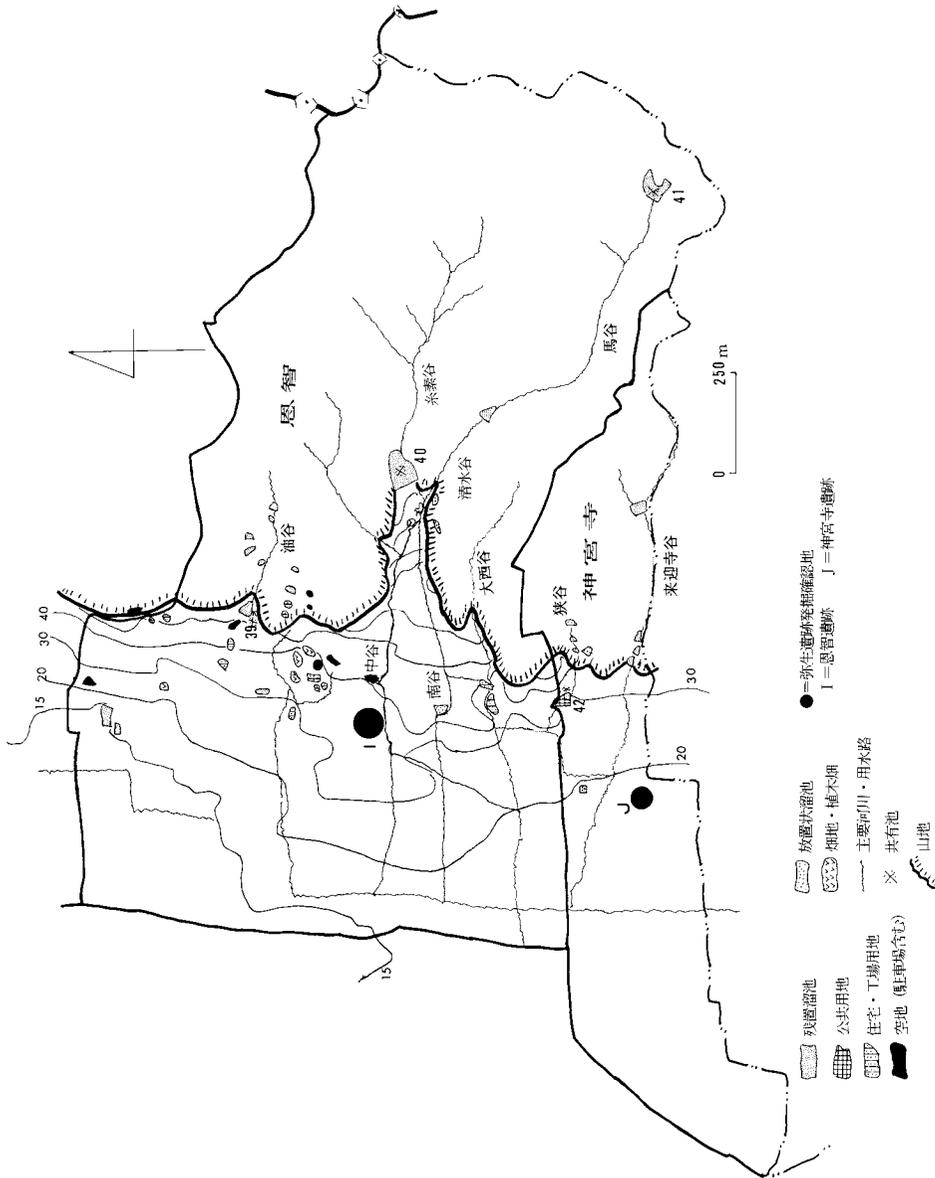
垣内は山間部を除く全区域が住居地域に指定されているため、特に扇端部の水田地を中心に住宅、工場などへの転用が著しく進行している。水懸かりの多くが喪失され、残置された水田地については、ひらい水によって充分まかなえるため、扇中部での小溜池の潰廃化が著しく進行している。1982年に垣内新池が転用されたのをはじめ、23池中14池に及び、そのうち9池までが、住宅用地として転用されており、垣内の溜池潰廃の傾向として特徴づけられる。あとの5池は埋め立てられたり、放置状におかれている（第1表・第2表）。

恩智

近世において、木綿取引に際し組合がつくられ、生駒山麓の木綿生産を対象に山の根き組があった（(2) 神立参照）。山の根き組に加入している商人の数は53名中、高安地区は27名で、そのうち恩智は14名にのぼっていた³⁸⁾。また、明治初期には、恩智に生花問屋のあったことが知られている³⁹⁾。こういったことから、恩智は南高安だけでなく、高安地区周辺一帯の町場としての役割を担ってきた経緯がある。

恩智地内に縄文前期～鎌倉時代に至る恩智遺跡（第9図Ⅰ）が確認され、その範囲は恩智の集落域を中心に扇頂部から扇端部にかけて広く及んでいる。1975～78年の恩智川改修にともなう扇端部の発掘調査では、弥生中期とされる35条もの溝や、土器溜り、木棺墓、土墳墓、井戸跡などが検出され、北寄りの溝内から花粉分析の結果、イネ科の花粉が多くみられ、南寄りに水田と密接に関わる大集落群のあったことがとらえられている⁴⁰⁾。扇端部に恩智中谷・南谷（清水谷、糸素谷）の谷流水を扇端部へ導水することによって、大規模に開削されていったものと考えられる。

谷筋は恩智中谷・南谷の他、北に油谷、南に大西谷がみられる（第9図）。油谷を中心に扇頂部から扇中部にかけて個人池を主とする小溜池群が点在する。扇中部から扇端部の中心部が住居地域に指定されており、近鉄大阪線恩智駅と至近距離で結ばれることから、垣内寄りの扇端部、神宮寺寄りの扇端部、各谷筋の扇頂部を除いて市街地化が著しい。恩智では専業農家が減少しているものの、高安地区にあって神立に次ぎ農業の高生産を維持しており、畑作面積の比重が高くあらわれている⁴¹⁾。これは都市農業としての枝豆、葉ごぼうの野菜生産に支えられ、その中心地をなしているため、都市農業としての高生産が維持され、住宅地化との両極分化の現象が顕著である。扇中部に位置する個人池の多くが転用され、潰廃溜池は43池中28池に及び（第1表）。住宅地に転用されたほか、残置された水懸かりへは谷流からのひらい水によって、



第9図 溜池分布と池敷の土地利用図 (恩智、神宮寺)

Fig.9 Land use on the abandoned reservoirs and distribution of irrigation reservoirs (Onji, Jinguji community village)

資料・注) 第6図と同じ。

充分まかなわれるため、畑地・放置状・埋め立てられた個人池が目立つ（第2表）。

共有池は、山間部に位置する恩智惣池（第9図・第3表40）、立原池（第9図・第3表41）、油谷筋の扇頂部に油谷地（第9図・第3表39）が確認される。恩智惣池は堤防を補強して貯水量を増幅させ、恩智中谷・南谷筋では立原池からの補水も見込まれることから、扇端部を除いて個人池の分布は少ない。油谷筋では最上流に共有池の油谷池、下流域に個人池が配されている。用水の余剰化から、油谷池より個人でパイプ管を敷設することによって、開栓すれば自由に導水できるシステムをとっている農家がみられ、共有池の利水をめぐって大きい変化が生じている。立原池は山間部に位置していることもあり、水懸かりの減少とともに、今では樋抜きすることは少ない。油谷池の池敷は、隣接地に建てられた老人福祉施設の大阪市立大畑山会館に売却されているが、水利権は継続されている。

恩智では水利状況が大きく変化しているものの、谷筋からの共有池の導水と個人池を併存させた形態をとっているため灌漑様式 の典型例といえる。

じんぐうじ 神宮寺

扇状地の形成は極めて小規模で、西の低地部に近接していることから、神宮寺での溜池分布は狭谷と来迎寺谷に沿ってみられる（第9図）。集落地内に共有池の里の内池（第9図・第3表42）がみられたが、公民館に転用され一部は防火用水として残置されている。今は、溜池から用水を得ることは少なく、ほとんど谷流とひらい水によってまかなわれているため、狭谷筋の個人池は放置状におかれ荒廃化が著しい。分布位置は変則的ではあるが、共有池がみられることから灌漑様式 の形態をとる。

扇央部から扇端部にかかるあたりに、弥生～古墳時代以降の集落遺跡である神宮寺遺跡（第9図J）が確認されている⁴²⁾。集落の西南にあたり、来迎寺谷の谷流を導水し、恩智遺跡（(3)

恩智参照）の西南部と近いことから、このあたり一帯が広範囲にわたって早くに開発されていたものと考えられる。

(4) 灌漑様式 （共有溜池・小溜池併存接続型）

おおたけ 大竹

大竹は、神立の北西に隣接し、区域は扇央部から扇端部にあたる。地内の東端に前期古墳とされる向山古墳（第6図e）、扇端部にかかるあたりに中期古墳の楽音寺・大竹古墳群最大の心合寺山古墳（第6図d）が位置する。共有池は大竹地内扇央部の最東端に花岡池（第6図・第3表8）、御池（第6図・第3表9）、定池（第6図・第3表10）、菱池（第6図・第3表11）、扇端部にかかる集落の西に大竹新池（第6図・第3表6）、大竹惣池（第6図・第3表7）がみられる。大竹新池、大竹惣池は心合寺山古墳の周濠池である。高安地区にあって最も多くの共有池が立地し、小溜池群は十三谷筋に沿った御池、定池、菱池の西寄りの扇央部と、大竹新池、大竹惣池の西の扇端部に集中している。こういったことから、共有池と小溜池群の関係がふたつ接続した形でみられ、灌漑様式 の典型的地域といえる。

大竹に分布する弥生遺跡として、大竹西遺跡（第6図D）、太田川遺跡（第6図E）、大竹遺跡（第5図F）がとらえられている。大竹西遺跡から縄文土器、打製石器、弥生土器、土師器などが出土し、集落の存在が確認されている⁴³⁾。太田川遺跡は南接する水越にかけて扇端部の末端から西方一帯にひろがり、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝状遺構などが検出されている⁴⁴⁾。これらの遺跡の発掘状況から、大竹の土地開発は弥生後期頃よりはじめられたものと推察される。大竹の地形は北部に比べ、水越寄りの南西部に低くなっている。余水もその方向への流下がみられ、弥生遺跡の分布とも一致することから、南西部面の開削が最も早く、その用水は、谷流から延伸の枝分流を導水し、後世に共有池の築造によって機能が増幅されたものと考えられる。

大竹の北西部は、水田の東端に築造された方形の小溜池群が顕著にみられることから、この部面の水利事情が最も困難であった。心合寺山古墳の西の周濠池である観音池（第6図ア）の底地から、寺院の礎石と古瓦が出土し、これが白鳳期から鎌倉～室町時代にかけて存続した秦氏一族の氏寺である広隆寺の末寺・秦興寺跡（第6図K）の一部であるとされている⁴⁵⁾。このことから、周濠池の西の部面が溜池として機能したのは、早くとも時代が安定した近世初期以降とみられ、古墳の盛土が西の堤塘の役割を果たし貯水が容易であったことから、上に位置する大竹惣池が築造され、それに続いて大竹新池、観音池の造池に及んだものと考えられる。大竹の北西部は、大竹惣池、大竹新池といった共有池によって開墾がなされ、補助水源として個人池の小溜池群が機能した構図がとらえられる。

大竹の集落の北東辺は、地内のなかでは高燥部にあたるため、最上流の花岡池から灌漑された。この部面は十三峠越の自動車道が整備され、楽音寺の大学建設地と隣接するため（(5) 楽音寺参照）農地が比較的早くに他用途へ転用され、1977年に花岡池全地が八尾市水道局に処分されている。大竹の溜池遺跡は84池中34池に及び、扇端北西部で放置状になった小溜池群の遺跡が目立つ（第1表）。この部面での0.1ha未満の小溜池は約40池を確認しているが、農地の一部に付随した個人池が相当数あったものとみられる⁴⁶⁾。大竹の営農の土地利用は、神立の作りとしての花卉栽培が広範にみられるのが特徴である。

おおくぼ 大窪

神立と境界を接する音越谷、服部川と境界を接する立石越谷の間に、平の谷、御所堂谷（片石谷）が流下する（第7図）。大窪の区域は、高安地区にあって山頂部から扇端部まで東西に長く、扇中央部から扇端部にかけて山畑を内包するような形で位置する。近世初期は干塚、山畑を含んで同一村の扱いになっている⁴⁷⁾。大窪地内の扇頂部から扇中央部にかけては未開墾地も多く、畑地・水田地が混在した形でひろがり、扇中央部から扇端部の北寄りの部面が主要域となる。

平の谷は大窪が取り込んでいるが、音越谷は神立との競合関係が強く（(2) 神立参照）、立石越谷は服部川と山畑の権利下にある（(3) 服部川参照）。御所堂谷は山畑との競合関係が強く、番水に入ると大窪1日、山畑2日の順序で取水する⁴⁸⁾。

溜池の分布は音越谷筋と平の谷筋に集中してみられる。共有池は音越谷筋の扇頂部に箕淵池（第7図・第3表18）、扇中部に大窪大池（第7図・第3表17）、集落東南の扇中部に位置する大窪惣池（第7図・第3表16）がとらえられる。小溜池群の多くは扇頂部から扇中部に分布し、集落西の扇端部にかかるあたりに比較的規模の大きい共有個人池がみられる。こういったことから、扇頂部・扇中部は小溜池群の個人池を中心にして共有池を、扇端部は共有池の惣池に共有個人池・個人池を絡ませていることから灌漑様式 の形態を示す。

扇中部の部面が広いこともあって水利事情は悪く、共有池の用水は下流域まで流下せず、谷流のひらい水にたよっている。また、扇中部に位置する個人池のなかには、水懸かりが扇端部の下流域に位置するため、導水距離が長くなるのが特徴である。田植時は主に個人池からの導水、谷流のひらい水によってまかない、共有池の用水は半夏生（7月2日）以降に送水される。個人池からの流水を「谷まわり」と呼び、共有池からの用水と区別してとらえられている⁴⁹。

植木畑（(3) 服部川参照）、花卉畑（(2) 神立参照）が広範囲にわたって水田地と混在してみられる。しかし、最近では他大字地区同様、水不足はかつてほど深刻な問題でなくなったため、溜池の管理が悪くなり、集落西寄りの個人池の放置例が目立つ。山畑に位置する共有個人池の大池（第7図キ）は、宗教団体の施設に転用されている他、小溜池群がみられる扇中部を中心に、59池中12池の放置状、畑地への潰廃が確認される（第1表・第2表）。

黒谷

黒谷は、教興寺との境界を流れる浅賀谷の流域に沿って溜池が分布する（第8図）。浅賀谷は黒谷の水利権下にあり、扇頂部から扇中部には小溜池を主とする個人池、扇端部に共有池の重頭池（第8図・第3表29）、生駒山地脊梁部に上蓮池（第8図・第3表31）、下蓮池（第8図・第3表32）がみられる。上蓮池と下蓮池は教興寺地内に位置するが黒谷の水利権下におかれ、余水は脊梁部に分布する水田に流下し、樋抜きの水は浅賀谷を経て黒谷に送水され、服部川の峰の惣池と同じ水利構造をもつものである（(3) 服部川参照）。

扇頂部の小溜池は放置状になっているものが多く6池にのぼる（第1表・第2表）。開発がすすんだ扇中部北寄りでは上蓮池と下蓮池の用水、扇端部では重頭池の用水が灌漑にあてられる。北西寄りに土地が低くなり、浅賀谷の用水は、その方向に灌漑されるため、重頭池の南辺部への灌漑には、一里松谷からの谷流と、教興寺地内に位置する共有池の半銅池（第8図・第3表30）の用水によってまかなわれる。一里松谷は、教興寺と垣内の権利が重なり、特に教興寺との併存関係が強い（(3) 教興寺参照）。浅賀谷筋は上蓮池・下蓮池を中心とする水懸かりと、重頭池にたよる水懸かりに区分できるため、変則的ではあるが、灌漑様式 の形態をとる。

近鉄信貴線信貴山口駅に近い扇頂部の山麓と、扇中部に住宅地が開発されているが、西寄りの扇端部の農地が比較的広範に残されている。

(5) 灌漑様式 (小溜池依存型と共有溜池・小溜池併存型の接続)**がくあんじ
楽音寺**

楽音寺は高安地区の北辺、東大阪市横小路と接する。地内に前期古墳といわれる西の山古墳(第6図a)、花岡山古墳(第6図b)、中の谷古墳(第6図c)などが位置し、南接する大竹所在の古墳を含め楽音寺・大竹古墳群と呼ばれる((4) 大竹参照)。楽音寺の集落は、小丘上に形成された西の山古墳の西方寄りの扇中央部に位置する。弥生遺跡として大光寺山遺跡(第6図A)、楽音寺遺跡(第6図B)、花岡山遺跡(第6図C)が確認される。大光寺山遺跡は、西の山古墳の東方、北方向に開析した浅い谷部に及んでみられ、楽音寺の旧集落跡とされている⁵⁰⁾。楽音寺遺跡は、今の集落の西方にあたり、縄文後期の土器片、平安時代の井戸跡、弥生~鎌倉時代の器類が出土している⁵¹⁾。花岡山遺跡は縄文後期の土器片、弥生時代後期の土壌墓、13~14世紀に下る掘立柱建物跡などを検出している⁵²⁾。

第6図に示したように、楽音寺の主な谷筋は中谷と樽堂谷のふたつである。溜池は、この谷流を導水した谷口部の斜面に30余りの小溜池群が分布する。そして、ふたつの谷流水を利用し、花岡山古墳と西の山古墳の間の地溝部に、楽音寺惣池(第6図・第3表1)、島池(第6図・第3表2)、楽音寺新池(第6図・第3表3)の共有池が築造され、西の扇中央部から扇端部にかけて灌漑する役割をもち、大小50余りの個人池と補完されている。東の谷口部斜面では谷流からの導水によって、それを小溜池群に貯水する。中谷では番水に入ると、3町前後の受益地を組み合わせたグループに4日に1日の引水権が認められ、それを輪番によって取水し、普段も所有水田ごとに4日に6時間の取水と決められている⁵³⁾。楽音寺の灌漑は、谷口部では小溜池群、それより西では、扇中央部に築造された共有池と小溜池を主体にした個人池にたよっているため、灌漑様式Iと の組み合わせられた灌漑様式 の形態をとる。

大光寺山遺跡に弥生期以降の旧集落跡が確認されていることから、楽音寺での土地開発は、山麓谷口部周辺において、谷流水と湧水をうけてはじめられたものと考えられる。今も谷口部には湧水帯が確認され、順次、これらの貯水化が試みられ、築造技術の進展とともに貯水機能が増幅され、扇中央部から扇端部の開削へとつながっていったのではないだろうか。大光寺山遺跡の旧集落跡は、文治期(1185~1190年)以前に現在地に移転したという伝えがあり、集落の北東に位置する西の山古墳という呼称は、旧集落の方角からみたもので、集落移転後もその名称が踏襲され、現在に至って使用されていたとみられている⁵⁴⁾。こういったことから、楽音寺の起源は文治期以前に遡ることになる。

楽音寺の溜池潰廃は、高安地区にあってその進行は早く、調査時において37池が確認される(第1表)。1960年に花岡山古墳が土取り工事によって消滅し、その跡地に大学が新設された。花岡山古墳の東隣に位置した共有池の新池が、大学の校地拡張工事にともない1973年に潰廃されている。その後も大学の北東周辺に校地の拡張がなされ、幾つかの個人池が処分された。大学生の自動車通学が常態化したことから、大学の西一帯にかけて駐車場が増加している。個人池のなかには、用水がかつてほど深刻な問題ではなくなったため、駐車場目的に埋め立てる例がみられる。これらのように大学関連の転用が、楽音寺での溜池潰廃の顕著な例となっている

(第2表)。さらに楽音寺では、土地が平坦になる西の扇端部にかけて、病院や福祉施設などが建設され、農地の転用が促進されるとともに、放置状や畑地に転用された個人池がみられる。

近世期において用水不足を補うため、高安の山の根木綿栽培((2) 神立、(3) 恩智参照)が盛んであった。現在は、谷口部を中心に花卉栽培((2) 神立参照)がみられる。

みずこし 水越

水越は、神立の西に隣接する。神立からの谷流水は、水越との境界付近において浸透し枝分流となる。その余水を集水し、水越では久保川(第6図イ)、水越川(第6図工)の流れになる。水越の溜池の集水は両河川より導水するため、この流域に沿って分布する。集落は水越地内の東寄りに位置するが、それよりさらに東に個人池が、西の下流域に下がるにしたがって共有池と個人池が混在し、さらに扇端部は耕地割に規制された方形の小溜池が分布する状況から、灌漑様式 の形態といえる。

大竹との境界付近の扇端部から西にかけて太田川遺跡(第6図E)が確認されている((4) 大竹参照)。さらに、扇端部の千塚に南接した地内に水越・千塚遺跡(第6図G)がみられ、弥生前期の土器、壺、高杯など、弥生～古墳時代の方形周溝墓、弥生中期の溝状遺構が検出され、周辺部には相当大きな規模の墳域と集落の存在が推察されている⁵⁵⁾。今も扇端部の末端から西方一帯の低地部に向け、上流から余水の集中する場所が一部にみられることから⁵⁶⁾、こういった部面の開発が早くにはじまったものと考えられる。

共有池は久保川流域に長池(第6図・第3表12)、水越惣池(第6図・第3表13)、水越川流域にトンボ池(第6図・第3表14)が分布する。小学校・中学校の建設をはじめ、工場地化のため、西寄りの扇端部の水懸かりが失われ、潰廃溜池は37池中18池に及ぶ(第1表)。小学校・中学校の建設地内には、小溜池が分布していたことから、水越の実際の溜池数は50池以上、潰廃池数は30池以上にのぼったものとみられる。水越川流域の個人池は水懸かりが失われたことから畑地に転用され、久保川流域では用水の余剰化から、共有池の水越惣池に機能を委ね、個人池を公園・駐車場に転用する例がみられる。扇端部の小溜池は、周辺の農地の転用が著しく、余水が生じたことから、ほとんどが放置状におかれている。水越惣池の貯水機能を考慮にいれ、埋め立てずに池上に公民館が建設されている(第2表・第3表)。

ちづか 千塚

水越に南接、神立の西南に位置し、近世初期には大窪に含まれていた((4) 大窪参照)。溜池は、神立と大窪の境界を流下する音越谷の下流にあたる千塚川(第6図オ)の流域と、水越川流域の南に沿って分布する。共有池は千塚大池(第6図・第3表15)のみであるが、個人池のなかには、二戸以上の農家が所有する共有個人池が多くみられる。千塚惣池(第6図ウ)や北川池(第6図カ)がその例である。神立との境界近くに小溜池がみられ、千塚川の上流域に共有池の千塚大池を配し、下流域に小溜池がみられることから、灌漑様式Iと を接続させた の形態をとる。水越・千塚遺跡((5) 水越参照)の分布や、溜池の形状・位置、導水、

灌漑様式とも水越と類似した水利構造をもつ。

農地が展開する西の扇端部は、高等学校・工場用地への転用が著しく、多くの水懸かりが失われている。そのため、共有池の千塚大池の3分の2が潰廃され、その一部に公民館、共有個人池の北川池は郷土資料館・市役所出張所が建設されている。潰廃溜池は20池中11池に及ぶ(第1表)。

やまたけ 山畑

第7図においてわかるように、山畑の域内は山間部をもたず、扇央部から扇端部にかけてひろがり、近世初期には大窪に含まれていた((4) 大窪参照)。それだけに、高安地区にあって谷流からの導水をめぐって、隣接する大字地区と関係し、御所堂谷は大窪との((4) 大窪参照)立石越谷筋は服部川との競合が強くなる((3) 服部川参照)。山麓の湧水である大窪地内の御手洗水の用水は、1ヶ月のうち5分の1は大窪の来迎寺(第7図L)あとの5分の4が山畑の権利下にある⁵⁷⁾。

地籍図によると、山畑は飛地が多く、何枚かの耕作地を単位として大窪地内に点在している。逆に大窪地が山畑に点在し、これが複雑に錯綜しているため、第7図の境界のように明瞭に区分することはできない。大窪の権利が優先する未開墾地に山畑の権利が入りこみ、個人池を中心とした小溜池群が築造されることにより、それを導水し扇央部から扇端部の開削に結びついていったものとみられる。大窪の耕作地の権利と調整を図りながら、開発がすすめられた結果、このように錯綜した区域が形成されたのではないだろうか。それだけに、山畑にとって谷流水の水利権を獲得していくことは、何よりも優先されねばならず、たえず隣接大字地区の動向を伺わねばならなかった。

山畑の共有池は、扇央部の集落東端に山畑惣池(第7図・第3表20)、扇端部にかかるところに城ヶ池(第7図・第3表19)がみられる。扇頂部から扇央部に向け、その北西部を灌漑した小溜池群、扇央部から扇端部に向け、共有池を中心に個人池を絡ませた灌漑がみられることから、灌漑様式IとIIが接続した形態を示す。城ヶ池は、服部川地内に位置し、1972年に公民館、公園に転用されている。潰廃溜池は25池中6池が確認され、駐車場、畑地への利用のほか、放置状の溜池がみられる(第1表・第2表)。

5. 灌漑様式類型化の展開

(1) 類型化の位置づけと指針

溜池水利は、集水、貯水(取水)、灌漑(送水、配水)、排水という四つのカテゴリーに区分され、溜池は著しい乏水地域のなかで、水田農業を可能ならしめるために、最小限度の用水を確保することを目的に築造された水利施設であるため、互いにこれらの機能が補完して存立する関係にある。なかでも溜池水利の最大の目的は、灌漑域に給水することを前提として成立するため、四つのカテゴリーのなかで灌漑システムが最も重視され、河川の流量、平野・谷部といった地形型、さらに土地政策上の問題など、さまざまな社会的要因が加わり、その時代にお

ける水利開削の歴史的背景のなかで、地域の水田農業と密接に関わりながら推移してきた。

筆者が今まで調査をおこなってきた松原市、堺市の事例⁵⁸⁾では、ひとつの溜池を単位とする灌漑域を基本に、地区共有池の親池を有する場合と、親池の権利が数地区にまたがっている場合、さらに、大規模な溜池が広域的な灌漑域に及んで、地区共有池の親池、子池に重畳する型に類型化される。高安地区での灌漑様式は、扇状地という土地条件に対して長い歴史のなかで、谷流水の導水をめぐって個人池を中心とした小溜池群に、共有池の機能を絡ませて成立してきた背景を注視せねばならず、平野部の溜池灌漑地域とは異なった特有の形態をとってきたのである。このように対象地域によって、灌漑様式はさまざまな形態に派生し、分類される。

白井・吉本は、兵庫県加西台地の670件の溜池の灌漑を事例に、受益地からみた灌漑システムとして、谷部の単独溜池の灌漑(1-A)、谷部のふたつ以上の溜池が重畳した灌漑(1-B)、平坦地に多くみられる事例として親池と子池が複合した灌漑(1-C)の三類型、さらに水源からみた灌漑システムとして、自己の集水域のみより貯留して灌漑機能を果たす型(2-A)、河川水を新造池に導水する灌漑型(2-B)、2-Aと2-Bの複合した型(2-C)と、これらが相互的に結びつく機能をみつけ、灌漑システムを考察する基本の資料としてとらえている⁵⁹⁾。さらに白井・吉本は、各種の事例研究をもとに水管理施設と人間活動のスキームを試みるなど、類型化が課題の分析と認識の有効な指針になることを示唆している⁶⁰⁾。

複雑に展開する灌漑システムを類型化することによって、それらをただ分類・整理するだけではなく、対象地域の水利特性を明確に位置づけることが可能となり、その背景として、土地条件や遺跡分布などの状況から、灌漑様式の類型の特徴を見据えた池溝開削の歴史的経緯を類推することにつながる。さらに、溜池水利の空間対象となる集水、貯水(取水)、灌漑(送水、配水)、排水の過程のなかで、機軸となる灌漑域の水利空間をとらえ、それを認知する営みに結びつき、灌漑様式の類型化が、水利秩序、水利集団・組織、集水・貯水システム、排水システム、水利施設の形態、権利関係などの課題を考える基本の枠組みとして、これらを整理・統合する役割が付随されてくる。こういった認識と同時に、地域性差を通して、対象地域の溜池水利のおかれた状況と、今後の高安地区での溜池の位置づけを考えていくアプローチの方法が模索されるのである。

(2) 共有池と個人池の補完関係と土地開削の経緯

高安地区では弥生遺跡の分布からとらえられるように、谷流水や湧水を導水することにより、水の得やすい帯に水田を定着させていった様子が推察される。扇状地段丘面が広く展開するため(第4図)、その範囲は扇端部を中心に、扇頂部・扇中部での水の得やすい一部の部面にとどまっていたものとみなされる。扇端部に分布する弥生遺跡のなかには、恩智遺跡のように大規模な集落群のあったことがとらえられたため((3) 恩智参照)、この地域一帯での土地開発の起点として位置づけることができるものの、土地条件の制約から旧大和川流域の低地部のような面的な広がりはみられなかった⁶¹⁾。生駒山地西麓扇状地面では可耕地を広げ、水を安定

的に確保するためには、水の反復利用を増幅させる方法を企図せねばならず、それが谷流水や湧水を導水した小規模な貯水施設の構築につながったのである。

平野部の中位段丘面に位置した弥生～古墳時代の代表的な池上・曽根遺跡の北辺にあたる泉大津市東助松地区で、大化期以前に遡って13世紀に複合する20箇所前後の埋没水路跡と、3箇所の埋没溜池跡を検証している⁶²⁾。埋没溜池の形成時期は遺物の発掘から鎌倉初期とみられているが、円形に近く径で4m余～10m余、深さ1.5m～2m程度のいずれも小溜池で、扇状地末端の伏流水・湧水を利用して貯水したとされている。こういったように小溜池による貯水は、既存の用水の不足を補い、新たな可耕地を広げる原点としての役割をもっていたといえる。それだけに立地場所によっては、かなり早い時期より小規模な貯水施設を施すことによって、用水源確保の手段がとられていたものと考えられる。同様に、高安地区では谷流水・湧水に依存した水利が基軸となり、これに付随した簡便な小溜池による貯水方法が古くよりとられていたものと推察されるが、その利水は不安定で小溜池の存廃がくりかえされていたのではないだろうか。

高安地区において、扇中央部の未開墾地が本格的に開田されていったのは近世初期に入ってからのことであろう。谷流水と湧水にたよっていたのが、漸次、築堤技術の進捗とともに、谷流に沿って小溜池が本格的に築造され、可耕地が拡大されていった。灌漑様式 の形態をとる神立がその典型例であり、扇頂部から扇中央部に多くの小溜池が谷流に沿って連続していることから想定される(第6図)。他大字地区においても同様に、小溜池の築造によって用水の供給が増幅されていった。しかし、依然として旱魃期には用水の不足が目立ち、砂礫質の土壤に適した木綿栽培が定着していくとともに、小溜池群に混在するような形で、共有池による用水の確保が図られるようになる。共有池の配水は、谷流の用水が減少した半夏生(7月2日頃)以降に樋抜きをする大字地区がみられることから、谷流水・湧水・小溜池を主体とする水利の補助的な側面が強くあらわれる。共有池の築造によって水利改良策がとられ、さらに安定的な用水を確保するため、共有池の増改修が図られ、機能を拡大していく傾向がみられる。恩智惣池(第9図・第3表40)、服部川惣池(第7図・第3表22)、郡川惣池(第7図・第3表26)などがその事例であろう。共有池の用水供給機能が増強されるとともに、その灌漑域に分布した小溜池は潰廃されていく過程をたどる。灌漑様式 を原点として、灌漑様式 へと進み、大字地区によって灌漑様式 ・ のパターンの広がりをみせていく。灌漑様式の類型化から、それぞれの大字地区の土地開発の経緯が類推されるのである。

神立では、正保郷帳の写しとされる『河内国一國村高控帳(1645年)』の石高は155石、『天保郷帳(1834年)』では156石余りで、この間の増石はほとんどみられない。大久保(大窪)では、近世初期以降、千塚、山畑を分村しているが、三村を併せ916石余りから949石余りで約33石、服部川では、郡川が分村しているが、二村を併せ932石余りから1,057石余りで約125石、黒谷では教光寺(教興寺)と併せ、701石余りから781石余りで約80石、垣内では302石余りから346石余りで約44石、の増石があった。その他、恩知(恩智)と楽音寺が10石程度の増石を示しているが、他の大字地区はいずれも1～5石増にとどまっている⁶³⁾。この石高の推移によ

るなら、高安地区では、1600年代前半までに開墾不可能な土地を残して、可耕地をほぼ開田していた様子が推察され、この時期までに谷流水と湧水を主体に、小溜池による灌漑システムがとられていたとみなされる。さらに継続して小溜池が築造され、共有池が順次整備・拡充されるとともに、高安地区で300石余りの開田が進められ、近世末期までには、今に継続される灌漑システムが成立していたと考えられる。しかし、小溜池のほとんどが個人池で、農家個々の石積みなどの技術が必要であり、所有農家の労務・管理上の負担が重くのしかかってくることになる。それだけに共有池と比べ、所有農家の思惑によって左右され、灌漑システムが完熟された段階でも、小溜池の存廃は流動的な側面をもって推移していたものとみられる。

堀内は、馬見丘陵の小溜池群を事例に、河川水の利用や村落池の築造によって谷底が最も早く開田され、開発が進むにつれ小溜池が築造され、丘陵上には新田集落が展開することを指摘している⁶⁴⁾。さらに、馬見丘陵の溜池の築造年代は、幕末から明治にかけて作られたものが多く、開削過程は村落池、組合池、個人池へと進み、大規模なものから小規模なものに、立地的には水利の良いところから悪いところに、組合池・個人池の所有は、それぞれの池懸かりの水田と一致することをあげている。高安地区においても、個人池の存廃は流動的であることから、共有池に付随してその機能を補完するために、新しい時期に築造されたとみられる小溜池群の立地が確認されるものの、谷流水・湧水から個人池の小溜池へ、さらに共有池へと派生した開削が基本となり、馬見丘陵とその経緯は大きく異なる。高安地区は扇状地面での小溜池群の立地であり、馬見丘陵は高度70～80m程度の洪積世の浅い谷が樹枝状に刻まれていることから、こういった地形に規制される谷流水や湧水の利水面での土地条件の相違、それに新田集落がみられる馬見丘陵と、古くより開発された高安地区の土地開墾との、歴史的背景の違いがあげられる。むしろ馬見丘陵の小溜池群の立地条件は、大阪府では、丘陵の開析谷に共有池が築造され、水が最も得にくい土地に小溜池群が立地した泉北丘陵、羽曳野丘陵と共通する側面が強いといえる⁶⁵⁾。

6. 今後の展望(まとめに代えて)

ふれてきたように高安地区の土地開発の歴史は古く、それを支えてきたのが生駒山地西麓を流下する谷流水と湧水であり、それを導水して土地開削を増幅させたのが小溜池群である。このような水環境のもとで共有池の築造がはかられ、水利の安定化が模索された。しかし、用水の不足は深刻で、それぞれの時期に、神立の花卉畑、服部川の植木畑のように新しい農業生産を定着させていった側面がとらえられる。こういったなかで、歴史・伝統が根強く残され、今に存続されているのが高安地区の土地開発の背景である。地域のなかで調和した溜池環境をみつめる時、このような水利の背景が注視されねばならず、灌漑様式の類型化をもとにして地域課題を抽出し、若干の検討を加えてきた。

以上のような水利開削の経緯が推察されるとともに、個人池と共有池が併存する状況から、これらを互いに機能させることになる。個人池、共有池のどちらの機能を優先させるか、それは各大字地区の水利事情によって異なってくる。大竹、水越、郡川、教興寺のように、共有池

の貯水量が比較的維持されている大字地区では、共有池にたよるため、個人池を主とした小溜池の潰廃の比率が高くあらわれる傾向がみられる。一方、小溜池を中心とした個人池の機能を重視する大字地区では、神立や大窪のように溜池潰廃の比率は低くあらわれる（第1表・第2表）。高安地区の溜池の存廃は、こういった水利事情に各大字地区での農地の他用途への転用度合い、農業高生産の維持、大学建設といった大規模施設の立地などの要因によって左右される。

筆者は、幾つかの実地調査をした事例において、松原市の場合、潰廃化が著しい地域であるため、溜池貯留水の浄化につとめ、灌漑機能と切り離れたところでの残置溜池を生かしたまちづくりの観点を、泉北ニュータウンでは、谷筋に残置されている溜池のもつ優れた自然景観の保全と、水資源としての上水道水への転用化の模索を、泉佐野市では優れた溜池景観が残されていることから、農業高生産の維持とともに、溜池景観をまちづくりの観点の中心に据えることを提起してきた⁶⁶⁾。大阪府のように多くの溜池分布がみられ、都市化の進展が著しい地域にあって、溜池の存在そのものが地域環境を支える根底に据えられてこなければならない。

高安地区の場合、とらえてきたように、今に存続される小溜池群の歴史ある水利の位置づけが大きな主眼点となる。小溜池群は放置されるなかで周辺の農業生産の変化とともに、このまま潰廃されていくべきものであろうか。今、ここで高安地区の農業高生産が期待できる大字地区をとらえ、そのなかで個人池や共有池の灌漑を含めた新しい機能を見だしていくことが求められる。神立では126池もの小溜池が群集し、花卉を中心とする農業高生産が維持され、他大字地区と比較して専業農家率は高く推移する。それに棚田状に展開した農地と小溜池群の調和と景観が優れ、長い歴史を通じて開発された伝統が土地に定着している。この神立を対象として、溜池景観を中心に据えた溜池水利・農業保全のモデル地域として位置づけることはできないものであろうか。小溜池群の保全は、神立のように種々の条件を兼ね備えたところからとらえていく必要がある。そして、神立を基軸にして、農業高生産が期待できる高安地区の全体に波及させる、農政サイドからの取り組みが重視されよう。

都市化地域の溜池の維持・管理について方策が検討され、実施されている大阪府の「オアシス構想」は、比較的大規模な溜池を対象にしているため、小溜池が群集する地域のことについてふれられていないきらいがある⁶⁷⁾。だが、こういった山麓の小溜池を中心とした農業地域こそ、農地と溜池が付随し水懸かりが近接しているだけに、保全のモデル設定は可能である。大規模な溜池ほど、灌漑地と離れ一体的にとらえる難しさが残る。支援体制をとれば確実に持続的に、有機的に周辺の地域とともに、地域環境のなかに自然と調和した溜池を取り込むことのできる地域は多くみられる。そのひとつが神立である。個人池の管理が困難になっていることから、小溜池群の機能を蘇らせ、小溜池群の新しい位置づけを図るためには、多くの予算措置が必要になってこよう。しかし、神立では伝統的な土地開削の背景から歴史的な価値をたかめるなかで、農業高生産を生かし、自然景観と調和した小溜池群の位置づけをはかることにより、持続可能な保全が期待できる。神立のような条件をもった地域でこそ、投資効果が大きく増幅されるのである。

溜池保全のモデル地区設定のためには、さらに営農者の意識調査や詳細な地域調査を積み重ねていかねばなるまい。本稿では、灌漑様式の類型化を前提に地域考察をふまえることによって、高安地区の水利特性を中心に、その変貌状況を検討してきたため、大字地区ごとの詳細な水利調査、過去に遡った土地利用の変遷、それともなう地域分析など、多くのことが欠落している。高安地区の水利を含む総合調査を実施し、小溜池群を中心とする水利保全を模索できるモデル試案づくりが望まれる。

〔付記〕

本稿は、前稿（注1）の継続として、調査当時（1989年、1990・92年）の経緯をもとに、小溜池群の水利特性を中心にまとめたものである。

資料蒐集にあたって八尾市下水道部河川課課長（当時）：大西正勝氏をはじめ、聞き取り調査において、多くの現地の方々にお世話になった。ここに厚く感謝の意を表する。

注）

- 1) 川内善三「八尾市生駒山地西麓扇状地における溜池潰廃の特質について」日本地理学会水の地理学研究・作業グループ活動成果報告書『水の地理学 その成果と課題』所収、1993、91-124頁。
- 2) 『ため池諸元表』は、1977年に八尾市下水道部河川課が作成したものである。大阪府農林水産部耕地課が主体となって、府下市町村の溜池管理部に調査を指示したもので、『ため池諸元表』は、この一環のなかで得られた資料である。
- 3) 山極二郎「大阪府下の灌漑農業（上）」地理学評論4-11、1928、1-21頁。
山極二郎「大阪府下の灌漑農業（下）」地理学評論4-12、1928、20-47頁。
竹内常行「棚田の水利 頸城丘陵と猿ヶ石川下流部丘陵地の棚田を例として」、早稲田大学研究紀要23、1974、1-24頁。
山極は で、池水、井戸水、川水の灌漑についてとらえ、 で交野台地の小溜池群の権利関係についてふれる。竹内は で、新潟県頸城丘陵牧村の小溜池を含む、溜池水利と棚田の関係についてとらえている。
～ などのように、小溜池の水利についてとらえた事例がみられるものの、その内容は他水利との関係のなかで付随してまとめられている。
- 4) 堀内義隆「奈良盆地馬見丘陵の溜池灌漑に関する研究」地理学評論30-10、1957、38-53頁。
- 5) 八尾市高安地区は、北高安村として大字楽音寺（以下、大字の冠称略）、大竹、神立、水越、千塚、中高安村として大窪、山畑、服部川、郡川、万願寺（字地に新家、式部、御領）、南高安村として教興寺、黒谷、垣内、恩智、神宮寺によって構成される。なお、旧北高安村と旧中高安村は、1931年に合併し高安村となっている。旧中高安村の万願寺は、玉串川右岸低地部に位置することから溜池を有せず、本稿では対象外とした。
- 6) 『大阪府農地改革史』大阪府農地部農地課、1952、63-65頁。
- 7) 森田敬一「六、生駒の産業（1）溜池」、藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』所収、大阪教育図書、1961、124-126頁。
- 8) 『八尾市史（前近代）本文編』八尾市、1988、561頁。
- 9) 本稿では、各大字名をとらえる場合、名称のみを記したが、「大字」そのものを指す時は、全体の高

安地区と区別するため大字地区とした。

- 10) 『ため池諸元表』資料作成調査時において、溜池名が不詳であったため、この時点で所有農家の名称を冠したものがみられる。
- 11) 前掲3)、 「大阪府下の灌漑農業(下)」、28-33頁。
- 12) 泉北丘陵では、泉北ニュータウン造成地内に886池の溜池が確認されている。そのうち主要溜池は約90池で、そのほとんどが開析谷を堰止めた構造の谷地で、谷部及び泉北ニュータウン造成地外の受益地に灌漑された。あとの800池近くが水田に付随して、主要溜池の灌漑機能を補完した谷筋の小溜池と、特定の主要溜池をもたず丘陵地及び丘陵地斜面の水田に付随して立地した小溜池群である(注58))。羽曳野丘陵においても泉北丘陵と同構造の溜池分布がみられ、相続により水田の所有名義を変更したが、水田に付随する小溜池の所有名義が変更されていなかったため、住宅地化にともなって、本家と分家が小溜池の所有をめぐる争うという事態が生じた事例がみられる(南河内郡美原町での実地調査時の聞き取りにおいて)。
- 13) 扇端郡では1970年代において、学校建設、工場建設などによって農地が転用されているが、水田に付随した方形の小溜池のあったことが確認されている。扇中部においても水利事情から、いち早く植木畑などに潰廃された小溜池がみられる。こういったことから、把握できなかった小溜池の潰廃は相当数にのぼる。
- 14) 大阪府においては、近代農業水利の原点ともなる大規模農業水利改良政策の一環として、1938年に新設された光明池をはじめ、さまざまな新規用水の創出がはかられてきた。泉北丘陵においては、1949～1960年にかけて(中断期間を含む)山間上流部に天濃池が築造され、泉北丘陵の尾根部を5.4kmの幹線用水路の敷設によって、旱魃応急対策用として補水した例がある。こういった動向と比べ、高安地区では大規模な農業水利の改善はみられず、伝統的な小溜池群にたよった水利構造が継続されたといえる。
- 15) 高安地区では、一般的に村池のことを惣池(そいけ)と呼ぶことが多い。八尾市都市計画図1/2,500図には「総池」の名称を付しているが、本稿では惣は入会権、水利権を管理統轄した農村の自治組織の意味があることから、「惣池」とした。
- 16) 浮田典良「六 生駒の産業 (7)木綿」、藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』所収、大阪教育図書、1961、149頁。
- 17・18) 妻鹿加年雄「第三編第五章 花きの生産と技術」、『大阪府農業史』所収、大阪府農業会議1984、P372-373頁。
- 19・21・22) 1989.8.9・10、神立での聞き取りによる。
- 20) 前掲6) 64頁。
- 23) 神立の専業農家数・第1種兼業農家数は、1980年で94戸のうち70戸と14戸、1990年で86戸のうち58戸と20戸であり、高安地区において営農に比重を置く農家率が群を抜いて高い(『世界農林業センサス：農業集落カード』による)。
- 24・25・26) 前掲6) 63頁。
- 27) 前掲8) 71-72頁。
- 28) 阪本和仁「都市近郊における造園業地域の形成と生産構造 八尾市高安地区と京都市右京区の場合」人文地理42-6、1990、67頁。
- 29) 服部川の場合、1970年の専業農家数・第1種兼業農家数は83戸のうち6戸と5戸、1980年で85戸のうち1戸と0戸、1990年で76戸のうち1戸と2戸であり、神立はもとより周辺大字地区の楽音寺、大竹、大窪、教興寺、黒谷、恩智などと比べても、脱農・兼業化の進行は早く、造園業者による水田地収斂

- の条件を備えていたといえる（『世界農林業センサス：農業集落カード』による）。
- 30) 前掲8) 224頁。
- 31) 『日本歴史地名体系第28巻：大阪府の地名』平凡社、1986、1,020頁。
- 32) 1989.10.22、垣内での聞き取りによる。
- 33) 前掲31) 1020・1021頁。
- 34) 藩政村時代での教興寺村は、元和年間（1615～1624年）より村高204石9斗3升6合7勺5才は伊東丹後守長実領、110石4斗9升3合は徳川氏代官の支配。同様に黒谷村も、村高263石8斗7升5合2勺5才は伊東丹後守長実領、198石2斗9升3合は徳川氏代官の支配となっている。伊東氏の領地は幕末まで両村とも同氏が世襲し、徳川氏代官領は幕末までに十回にわたって支配替えがあるが、両村とも同領主の経過を辿る（後掲36）749・756頁）。同じ藩による分割支配が続いたのは、高安地区の藩政村では両村のみであり、領分は分離されながらも互いに併存する関係にあったといえる。
- 35) 前掲8) 229-232頁。
- 36) 井上正雄『大阪府全志（巻之4）』清文堂出版（復刻版）1922、751頁。
- 37) 惣池が幾つかある場合、中心的な池を惣池とし、他の溜池を惣池からみて、新池などの名称がつけられる。垣内では、共有池に惣池という名称が付せられていないため、総称して惣池と呼称した（前掲15））。
- 38) 前掲8) 590頁。
- 39) 前掲17・18) 372頁。
- 40) 前掲8) 67頁。
- 41) 恩智の専業農家数・第1種兼業農家数は、1980年で228戸のうち43戸と31戸、1990年で198戸のうち23戸と49戸であった。農産物販売金額第一位の部門別農家数では、野菜類農家数は1990年で、高安地区全体（万願寺を除く）の99戸に対し66戸、野菜類の販売農家経営耕地面積は4,033 a に対し2,688 a で、それぞれ7割近くを占める。葉ごぼう、枝豆、ほうれん草、ねぎの生産が多くみられる（『世界農林業センサス：農業集落カード』による）。
- 42) 前掲8) 65頁。
- 43) 前掲8) 75頁。
- 44) 前掲8) 73-74頁。
- 45) 前掲8) 217-221頁。
- 46) 1961年測量、3,000分の1大阪府作成図によると、調査時点で確認したより以上の小溜池の分布がとらえられる。
- 47) 前掲31) 1019・1020頁。
- 48) 前掲6) 63頁。
- 49) 1989.8.11、大窪での聞き取りによる。
- 50) 前掲8) 75頁。
- 51) 前掲8) 75-76頁。
- 52) 前掲8) 74-75頁。
- 53) 1989.8.28、楽音寺での聞き取りによる。
- 54) 前掲36) 780-781頁。
- 55) 前掲8) 72頁。
- 56) 1989.8.11、水越での聞き取りによる
- 57) 前掲6) 63頁。

- 58) 川内眷三「松原市における灌漑用溜池の潰廃傾向について」人文地理35-4、1983、40-56頁。
川内眷三「松原市における灌漑用溜池の潰廃にともなう農業水利構造の変化について」大阪府私立中・高社会科研究会誌8・9合併号、1989、35-54頁。
川内眷三「泉北ニュータウン造成にともなう灌漑用溜池の潰廃とその保全」法政地理17、1989、13-26頁。
- 59) 白井義彦・吉本剛典「兵庫県加西台地の灌漑システムと水利調整」兵庫教育大学研究紀要9、1989、148-150頁。
- 60) 白井義彦・吉本剛典「流域管理モデルの構成 環境教育への展開」学校教育学研究4(兵庫教育大学学校教育センター)1992、55-71頁。
- 61) 高安地区では特に扇端部の南北に並んだ弥生遺跡の分布が顕著であるため、谷流水と湧水を導水した部面が自然的に最も用水が得やすく、さらに旧大和川の低湿部に派生していったことが考えられる。このように、高安地区での水の得やすい部面の開発が最も早かったものの、扇中央をはじめ扇状地段丘面一帯では水が得にくく、高安地区では旧大和川流域低湿部のような、面としての拡大した広がりがみられなかったものとみなされる。
- 62) 日下雅義『歴史時代の地形環境』所収、「槇尾川右岸の埋没地形と居住環境」、古今書院、1980、207-215頁。
- 63) 前掲31)「行政区画変遷・石高一覧」1572頁による。
- 64) 前掲4)38-45頁。
- 65) 前掲12)。
- 66) 前掲58)及び、
川内眷三「泉佐野市・榎井川流域の溜池環境と水利転用について」法政地理20、1992、49-68頁。
- 67) 『オアシス構想 溜池整備基本構想』大阪府農林水産部耕地課、1991。
『オアシス環境づくりマニュアル』大阪府農林水産部耕地課、1992。

A study on the patternization and regional considerations of irrigation systems in the groups of small irrigation reservoirs along the alluvial fan at the west base of the Ikoma mountain region in the City of Yao, Osaka Prefecture

Kenzo KAWAUCHI

Abstract: The characteristics of canal irrigation and the condition of the ruins of reservoirs and groups of small irrigation reservoirs along the alluvial fan at the west bottom of the Mt. Ikoma region are studied in this paper .

The number of irrigation reservoirs surveyed amounts to 595. Of these, 554 irrigation reservoirs are privately owned and managed, while no more than 41 are operated by communities. 463 irrigation reservoirs, amounting to about 80 percent, have a high water area of less than 0.05ha. Distribution systems can be divided into four as follows. First, the region depends on groups of the small private irrigation reservoirs (Irrigation System No.1) Second, groups of small private reservoirs and community reservoirs coexist and perform a mutual function (Irrigation System No.2) Third, multiple groups of small private irrigation groups combine to provide the necessary irrigation (Irrigation System No. 3) Fourth , small groups of private irrigation reservoirs combine with groups of community reservoirs (Irrigation System No. 4)

The region surveyed here has a long history of reclamation based on mountain streams running into the valleys along the western foothills of Mt. Ikoma. Utilizing these streams, people expanded reclamation so that groups of small irrigation reservoirs were made possible. Based on the same circumstances, community irrigation reservoirs were also constructed where a stable water supply was in demand. Nevertheless, shortages of water for irrigation caused serious problems. Therefore several new ways of agricultural production were devised and established in each era as follows: cotton was grown in the Edo era (1603-1868) flowers became common in the middle of the Meiji era (1868-1912) and tree farming became popular near the end of the Meiji era .

The number of abandoned irrigation reservoirs including (some of abandoned non irrigation reservoirs) is 213. The number of private irrigation reservoirs is 200. The rest of them, 13 are community owned. As a result, some small irrigation reservoirs have become abandoned, the number being about 84. Additionally, 20 irrigation reservoirs have become buried, 34 irrigation reservoirs have been converted to farming fields, 18 have been converted to parking lots, and about two thirds have become abandoned and are currently vacant lots. The loss of irrigation in the area, the transition from farming to flowers and later tree growing caused a water surplus for irrigation. Labor and expenses for maintaining the irrigation reservoirs proved

to be too much for the farmers. Consequently, farmers found that leaving their reservoir land vacant was the easiest way to manage it.

Compared with the progress of Matsubara City, which has undergone remarkable urbanization, the process of modernizing abandoned community reservoirs has made slow progress. 11 irrigation reservoirs out of 13 were diverted to public space. 7 of them were utilized for constructing community halls. It has become a modern trend to divert the abandoned reservoirs to public property. This can be seen in Matsubara City, the Kanata district in Sakai City and in Izumisano City. In the case of the surveyed region, about 90 percent of the area of abandoned community irrigation reservoirs has been diverted to public land. Most reservoirs are less than 1 ha, which make them difficult to be used for other purposes except public land.

Recently, the urbanization and industrialization of Osaka Prefecture have resulted in changes in the irrigation reservoirs which once harmonized with the communities. However, in the areas surveyed in this study, the slow tempo of the cities makes it possible to anticipate continued agricultural production. In order to balance these features, problems such as determining the functions and environmental safeguards for irrigation in both the community and for private irrigation reservoirs, as well as evaluation of the value of the irrigation reservoir groups in terms of both irrigation and their value as objects of natural beauty, need to be solved.

Key words : alluvial fans at the western base of the Mt. Ikoma region, groups of small irrigation reservoirs, irrigation systems, ruins of irrigation reservoirs, environment of irrigation reservoirs, regional consideration